

第1章 2008年(第16回)アジア農村研究会報告

アジア農村研究会

はじめに 2008年ナムディン調査の概要

新美達也・澁谷由紀

本章は2008年3月アジア農村研究会第16回調査実習「ベトナム北部ナムディン近郊農村調査」の報告である。本章は、2008年3月アジア農村研究会第16回調査実習レポート「ベトナム北部ナムディン近郊農村調査報告書」(2008年7月東京大学文学部東洋史学研究室アジア農村研究会発行)の一部を改変し再録したものと、インタビュー調査の記録によって構成される。

(1) アジア農村研究会の調査実習とは

アジア農村研究会は、1992年に東京大学の大学院生を中心とする学生有志によって設立された研究会である。同会はアジアに関心を持つ学生が大学・専門分野に捉われずに共同で調査を行うことで、歴史学・人類学など異なる学問分野の方法論を交流させ、現地調査への理解を深めると共に、現地の研究者・学生・住民との交流の機会を提供することに努めてきた。

これらの活動方針のもと、同会はアジア各地において広域調査実習を6回、特定の村落や街区での基礎調査実習(定着調査)を17回、合計23回の調査実習を実施してきた(表1)。各回の調査実習はおよそ2週間である。調査実習の具体的内容は、景観観察(広域調査の場合)、村落の測量および地図作成・質問票に基づいた聞き取り・コンピューターへのデータ入力(定着調査の場合)である。同会の顧問は第1回(1993年)～第20回(2012年)までバックコック研究を立ち上げた桜井由躬雄であった。

表1：アジア農村研究会が実施した調査実習の一覧

| |
|---|
| 第1回(1993年) タイ：東北タイ広域調査 |
| 第2回(1994年) タイ：中部タイ・ナコンパトム県定着調査 |
| 第3回(1995年) 中国：上海・松江県洞鎮花橋村定着調査 |
| 第4回(1996年) 台湾：台湾・桃園県復興郷霞雲村定着調査(◇) |
| 第5回(1997年) インドネシア：スマトラ広域調査(◇) |
| 第6回(1998年) マレーシア：ペナン街区定着調査(◇) |
| 第7回(1999年) マレーシア：スランゴル州フルチュチュ村定着調査(第1回) |
| 第8回(2000年) 日本：沖縄県浜比嘉島定着調査 |

| |
|---|
| 第9回 (2001年) マレーシア：スランゴル州フルチュチュ村定着調査 (第2回) (◇) |
| 第10回 (2002年) タイ、マレーシア：南タイ・北マレーシア広域調査 (◇) |
| 第11回 (2003年) タイ：北タイ・トゥンヤオ村定着調査 (◇) |
| 第12回 (2004年) ベトナム：ハノイ街区定着調査 |
| 第13回 (2005年) ミャンマー (ビルマ)：ミャンマー (ビルマ) 広域調査 |
| 第14回 (2006年) 韓国：忠清南道燕岐郡錦南面壺灘里定着調査 |
| 第15回 (2007年) タイ：バンコク・華人街調査 |
| 第16回 (2008年) ベトナム：ナムディン省ヴーバン県定着調査 (◆) |
| 第17回 (2009年) ベトナム：ビンズオン省ベンカット県定着調査 (◆) |
| 第18回 (2010年) マレーシア：クダ州パダンセラ定着調査 |
| 第19回 (2011年) インドネシア：西ジャワ州カラワン県定着調査 |
| 第20回 (2012年) タイ：ウボンラーチャターニー・ベトナム人コミュニティ定着調査 (◆) |
| 第21回 (2013年) カンボジア：カンボジア広域調査 (◆) |
| 第22回 (2014年) ベトナム：ティエンザン省チョガオ県定着調査 (◆) |
| 第23回 (2016年) インド：南インド広域調査 (☆) |

凡例：

- ◇ 三菱銀行国際財団による助成を受けたもの
- ◆ 公益財団法人三菱 UFJ 国際財団による助成を受けたもの
- ☆ 公益財団法人トヨタ財団による助成を受けたもの

注：

表中の調査実習名は通称も含む

出所：

アジア農村研究会ウェブサイト (<http://anoukai.com/about/>) 2020年8月16日最終閲覧

(2) 第16回調査実習の概要

第16回調査実習は2008年3月6日から18日までの13日間、工業化にともなう農村の変容をテーマにバックコックで行われた。

著者らの記憶によれば、調査地をバックコックに選んだ理由は下記の通りであった。2008年の段階でアジア農村研究会の調査実習がベトナム国内で行われたのは第12回(2004年)のハノイ街区定着調査のみであった。東南アジアの各国において、農村における定着調査を幾度となく実施してきた同会にとって、ベトナム農村における定着調査の機会が切望されていた。この年までにベトナムの農村調査が避けられてきたのは、ベトナムではカウンターパートの学術機関を通じて地方政府から調査許可を得ることは難しいのが通例であったうえ、アジア農村研究会の調査実習はすでに独り立ちしベトナム研究を専攻する研究者

によって実施される調査ではなく学部生・大学院生の調査実習であることから地方政府や調査地の理解を得ることにより困難を伴うと予想されていたからである。このような状況ではじめてベトナム国内での農村定着調査の実施に踏み切るのならば、アジア農村研究会と調査地の間に何もコネクションがない村落よりも、ベトナム村落研究会が長年にわたり学際的に定点観測を実施し、桜井由躬雄をはじめとするメンバーと村との間に既に顔の見える関係が築かれていたバックコックが調査地として望ましいと考えられた。

調査実習のテーマには工業化にともなう農村の変容が選ばれ、インタビュー調査のインフォーマントは村内に居住しながら工業区における労働によって現金収入を得ている青年に絞られた。工業区（工業団地）から南に数キロ離れた場所に位置しているバックコックでは、当時多くの青年たちが工業区に通勤しはじめていた。当時、ベトナムの多くの農村が工業化によって変容のただ中にあっただが、バックコックはそれらの農村のうちの一つと位置付けることができたし、バックコックの青年たちと同世代のアジア農村研究会の参加者たちのインタビュー調査を通じた国際交流の教育的価値が評価されたからである。ただし調査実習開始後、夜間や日曜日を中心にインタビューを行うことの困難が明らかになり、結果として3月13日以降、調査時間は日中に限定され、インフォーマント予定者の家族もインタビューの対象者に含まれることになった。

日本側の参加者は、内田みどり、梅本賢一、浦田、大久保、小川絵美子、金城れい子、小金丸恵美、澁谷由紀、神康文、鋤柄、勢村かおり、高須、東條哲郎、内藤（真）、中川ふみ子、新美達也（団長）、日置文香、松田孔明、三浦、光成歩、森田健太郎、山崎美香、桜井由躬雄、内藤耕、小川有子の25名であった（2021年3月時点で連絡がとれ、実名表記を許諾した参加者のみフルネームで示した）。これらの日本側参加者のうち、顧問・団長・通訳担当者等を除いた参加者は5つの班に分かれた。各班の構成は下記の通りであった。

東條班 :東條・小川（絵）・金城・三浦/東條・澁谷・三浦・金城

梅本班 :梅本・澁谷・松田・大久保/梅本・松田・光成

光成/小金丸班 :光成・鋤柄・小金丸・山崎/小金丸・鋤柄・山崎・小川（絵）

森田班 :森田・高須・内藤・中川・内田/森田・高須・内藤・内田・大久保

勢村班 :勢村・日置・浦田（会計）・神

また、ベトナム側の参加者は Thu、Hoa、Hong、Loi、Huyen、Tuyet、Dung、Trang、Phuong、Ha（いずれも当時ベトナム国家大学ハノイ人文社会大学東洋学部日本学科）であった。ベトナム村落研究会のインタビューは調査者がベトナム語で実施する機会が多いが、アジア農村研究会の参加者の多くはベトナム語話者ではなく、またベトナムの状況にも精通していない。そのためベトナム側の参加者は日本側参加者を語学面・知識面でサポートした。

タインロイ社およびコックタイン合作社には調査実習を快く受け入れていただき、暖かいご協力をいただいた。またベトナム国家大学ハノイ人文社会大学および同大学ベトナム学・科学発展研究所には調査の実施にあたり多大なご理解とご支援をいただいた。とくに

Dặng Xuân Kháng 先生、Phan Hải Linh 先生、Nguyễn Thị Phương Anh 先生には調査に同行いただき、ベトナム側参加者をご紹介いただくなど大変お世話になった。ここに記して感謝申し上げる。

(3) 経緯

アジア農村研究会第 16 回調査実習の調査結果は、2008 年 7 月に調査レポート「ベトナム北部ナムディン近郊農村調査報告書」(PDF 版)として発行され、関係者で共有されたが、冊子体は発行されなかった。そのため PDF 版・冊子版ともに図書館等の公的機関で保管されないことになった。また聞き取り調査の内容については、PDF 版冊子版としても編集されることはなく、電子データとして調査参加者に共有されるのみであった。アジア農村研究会の調査実習の参加者は毎回異なり、さらに調査実習地も原則として毎回異なるため、聞き取り内容は報告書以上に散逸の可能性があった。

バックコック研究は 2008 年以降もベトナム村落研究会によって継続された。しかし同じ世帯に同内容の聞き取りを行うことは村側に対して礼儀を欠くという考えから、2008 年のアジア農村研究会調査実習で聞き取った情報については、ベトナム村落研究会では再度聞き取らなかった。

このような事情により、「ベトナム北部ナムディン近郊農村調査報告書」と聞き取り情報を、ベトナム村落研究会をはじめ関係者がアクセス可能な状態で保存することが望まれた。今回、『百穀社通信』19 号の 1 章として 2008 年 3 月アジア農村研究会第 16 回調査実習「ベトナム北部ナムディン近郊農村調査」の報告が掲載されたのは以上の事情による。

(4) 内容と構成

「ベトナム北部ナムディン近郊農村調査報告書」は班報告部分および個人報告部分、質問票と写真から構成されている。ここに再録したのは、班報告と、個人報告のうちの一部と質問票のみである。個人報告部分に関しては、全執筆者から掲載許可を得ることは実現可能性が薄いこと、学部生・大学院生の調査実習であることから、アジア農村研究会第 16 回調査実習以前よりバックコック研究プロジェクトの参加者でもあった参加者の個人報告のみ再録することとした。

再録にあたっては、原則としてそのまま再録することとしたが、PDF 化の際に編集原稿から欠落した部分の修正や表記の削除・修正等を行った。編集作業は澁谷由紀が行った。

一方、聞き取り調査の内容については、インフォーマントの個人情報保護と不利益発生に対する配慮等のため、個人情報の削除や内容の大幅削除を行い、個人が特定できない形で掲載しようと当初考えていた。既に聞き取りからはまる 13 年程経過しているが、地名や企業名についても固有名詞の多くを削除した。編集作業は小川有子・藤倉哲郎・澁谷由紀が担当した。しかしながら、聞き取り内容には家族情報が含まれるため、匿名化しても推測がつく可能性が否定できず、『百穀社通信』への掲載は行わないこととした。

非公開のオリジナルデータについては、引き続きアジア農村研究会が保管している。

本章の構成は下記のとおりである。

- | | | |
|------|--|-------------|
| はじめに | 2008年ナムディン調査の概要 | (新美達也・澁谷由紀) |
| 第1節 | 2008年ナムディン調査東條班報告：工業化における農村社会の発展 | (金城れい子) |
| 第2節 | 2008年ナムディン調査森田班報告 | (森田健太郎) |
| 第3節 | 2008年ナムディン調査勢村班報告： 彼らは「この村に住むこと」をどう考える？ | (勢村班一同) |
| 第4節 | 2008年ナムディン調査梅村班報告： 青年はなぜ工業区へ？—青年と工場勤務、農業、農村 | (光成歩) |
| 第5節 | 2008年ナムディン調査光成・小金丸班報告： 社会的・経済的变化における価値観の変容についての考察 | (小金丸美恵) |
| 第6節 | 2008年ナムディン調査報告：離農化・高学歴化と村の将来像の多様性 | (澁谷由紀) |
| 第7節 | 2008年ナムディン調査報告：紅河デルタ農村の就労状況の変化 —調査地・コックティン合作社区域における変化について | (小川有子) |
| 第8節 | 2008年ナムディン調査報告：生活の市場化と工業区 | (桜井由躬雄) |
| 第9節 | 質問表（日本語、ベトナム語） | (アジア農村研究会) |

第1節 2008年ナムディン調査東條班報告：工業化における農村社会の発展¹

金城れい子

1. はじめに

東條班では、「工業化により農村社会はどのように発展したのか」という問題関心に立ち、農村社会に居住しながら工業区における労働によって現金収入を得ている若者の、意識の変化、現金収入の用途に着目し、工業化による農村社会の変化を分析した。

まず、インフォーマントが現金収入を得た後の現金の使い方を、下記の3つにカテゴライズした。

(1)現金収入の直接的な用途→家計を支える、冠婚葬祭費

(2)数年間の貯金による→職場までの交通手段(=バイク)、貴金属 等

(3)より長期的な計画→A.家を建てる(増改築を含む)、B.起業したい、A B.両方

2. 聞き取り情報

次に、(3)のより長期的な計画をもつインフォーマントを、全聞き取り件数79件からピックアップし、支出、バイク、農業への考え等を整理・分析した。

その結果は以下ようになる。

「A.家を建てる」と答えたインフォーマントは、「A B.両方」を含めて22人(既婚者19、未婚者3)、70年代半ばから80年代初めに生まれた人、すなわち20代後半から30代にこの傾向が強く見られた。貯金は、していない、もしくはできないと答えた人は、家を建てたい、増改築したい、という希望的回答が多く、それに対して、現在新築中、増改築中、もしくは増改築済みの人は、貯金がある傾向にあった。また、「今後も現在の仕事を続けたい」人は、22人中6人であった。

「B.起業したい」と答えたインフォーマントは、「A B.両方」を含めて9人(既婚者4、未婚者5)、全聞き取り件数中約11.4%であり、80年代半ば以降に生まれた人、すなわち10代後半から20代前半が7人を占めた。貯金は9人全員がしており、また貯金額を把握していた。起業の場所については、現在居住している同ソム内を希望する人が9人中5人、現在の仕事については、近い将来辞めると答えた人が9人中4人、辞めないと答えた人は0人であった。

「A B.両方」と答えたインフォーマントは3人であり、3人とも既婚者、そのうち女性が2人であった。

| | | 既婚者 | | 未婚者 | | 合計 | |
|---|----|-----|----|-----|---|----|----|
| A | 男性 | 5 | 16 | 3 | 3 | 8 | 19 |

¹ 本節は2008年3月アジア農村研究会第16回調査実習レポート「ベトナム北部ナムディン近郊農村調査報告書」(2008年7月東京大学文学部東洋史学研究室室内アジア農村研究会発行)25-27頁を転載したものである。

| | | | | | | | |
|----|----|----|----|---|---|----|----|
| | 女性 | 11 | | 0 | | 11 | |
| B | 男性 | 1 | 1 | 3 | 5 | 4 | 6 |
| | 女性 | 0 | | 2 | | 2 | |
| AB | 男性 | 1 | 3 | 0 | 0 | 1 | 3 |
| | 女性 | 2 | | 0 | | 2 | |
| 合計 | 男性 | 7 | 21 | 6 | 8 | 13 | 28 |
| | 女性 | 13 | | 2 | | 15 | |

3. 考察

家の修繕、新築や、起業したいといった長期的なビジョンは、バイクの購入という、短期的な貯金による購入希望傾向とは必ずしも連関しない。Aのインフォーマントのうち、バイクを既に持っている人は19人中10人、Bは3人、ABは2人、また、まだ持っていない人でバイクが欲しい人は、Aで1人、Bで3人、ABで0人であった。

「A.家を建てる」のみを希望したインフォーマント19人のうち、既婚者は16人であることから、家庭を築いている男女に、工場労働で働いた現金を、家の修繕や新築にあてようとする傾向が強く見られることがわかる。

バックコックでは、1980年代の第一次住宅ラッシュによりそれまでの草屋根が赤い瓦葺に(50平米あたり約2000万ドン)、95年以降の第二次ラッシュにより、約60%の家が四角形のセメント建てになった(50平米あたり約4000万ドン)。さらに、2000年から2005年にかけて、床の総タイル化のブームがあり、これには50平米で約8000万ドンから1億ドンかかっている。バックコックにおいては、既に家の床面積が増えるという許容性がないため、家のための資金という場合、現在彼らがどのような家を建てたいのか、そしてそのためにはいくら貯金しなければならないのかという、ファッション性と貯金の関係を捉える必要がある(桜井先生)。

また、ベトナムは核家族傾向が強く、かつて、結婚したら家を持つという伝統があった。しかし、バックコックにおいては、絶対的な土地面積の不足により、新婚でも両親と同居せざるを得ないという状況が生まれつつある＝若者にとっては苦痛であろう(桜井先生)。

お金と土地という二つの阻害要因の中で、若い世代が家に対してどのような考え方をもっているのかを、改めて考える必要がある。

「B.起業したい」のみを希望したインフォーマントを見ると、6人中5人が未婚者、また4人が男性である。全員が起業への夢を持ち、少額でも貯金をしているが、その多くは、これまで自分の生まれ育った地域での起業であり、ナムディンやハノイといった地域での起業を目指すものは、それほど多くない。ここには、もうかるからというよりも、業を身につけて安定を、といったベトナム人の「豊かさ」の価値観がある(桜井先生)。

しかし、今回十分に取り上げることはできなかったが、遠距離居住者の中にはハノイで起業しているものもいる。今回のインフォーマントの中にも、「できれば海外で働きたい」と考える 25 歳の既婚女性、村での起業のため、海外へ出稼ぎに行く 27 歳の既婚男性など、より広い視野を村の人々が持ち始めている可能性も垣間見える。

4. 終わりにかえて

今回の調査において出なかった点として、子どもに対する養育費がある。主な支出に子どもの養育費、学費という返答もあったが、それほど多くはなかった。これは、今回インタビューしたインフォーマントの大多数が、結婚期間が浅くまだ子どもが小さい者、もしくは親と同居する未婚者だったためと思われる。現在のベトナムは大変な学歴社会であり、子どもには将来のためにできる限りよい教育を受けさせたい、という親の考え方は、農村においてもしかりである。

今回のインフォーマント世代の若者にとって、子育てのための貯金というのは近い将来の計画としてあるが、そんな余裕がない、まだなかなか現実として捉えられない、といった考えが現実であるかと思われる。数年後、上記のインフォーマントの子どもが学校に通い始める時、また、未婚者が結婚して子どもを持つとき、彼らのビジョンがどのように変化するのか、今後の課題としたい。

最後に、今回の調査において、多く見られた主な支出の一つに、冠婚葬祭費があげられる。特に、結婚適齢期と呼ばれる 20 代-30 代の若者の冠婚葬祭費の増加は、工業化による社会的ネットワークの広がりを示しているように思われる。より広い視野で考える若者が増加していく可能性が垣間見える一方、村落に残る事を選び、工場労働を開始した若者の中には、長期的には生まれ育った村に基盤を持って生活してこうとする傾向がある。

しかしながら、特筆すべきは農業に対する考え方である。今回取り上げたインフォーマント 28 人のうち、現在農業に何らかの形で関わっている者は 4 人、その他無回答を除き、ほとんどの者が農業は大変で低収入なため、子どもには継がせたくない、もしくは離農すると答えた。桜井先生は「夢やぶれた若者が農村回帰」する可能性を話されたが、彼らにとっての「幸せ」とは何なのか、「豊かさ」とは何なのか。今回の調査をとおして、「幸せ」の意味、「豊かさ」の意味、そして「発展」の意義を、今一度考える必要性があると強く感じた。

第2節 2008年ナムディン調査森田班報告¹

森田健太郎

1. はじめに

今回の調査は、桜井由躬雄顧問による14年の研究の蓄積があるバックコックの地において行われた。それはすなわち、調査実習とはいえ、これまでのバックコック研究の系譜に位置付けられるべき成果が求められることを意味し、従来の調査実習とはやや趣を異にしていた。今回の調査目的は、工業区の設置にともなう農村の生活変化を調べることにあった。具体的には、2003年にナムディン市郊外にホアサー工業区が成立し、若年層が工業区に勤めるようになって現在に至るまでに、バックコックにおける農村生活に如何なる変化が起きているかについてインタビューを行い、その分析を通して、“Sáng đi tối về”（コミュニティンクモデル）或いは「食べるための経済・稼ぐための経済」という、工場労働と農業が両立する農村の経済システムが今後も成り立っていくのか、という問いに迫るものである。森田班は、かかる調査趣旨に基づいてインタビュー調査を行う中で、工業区設置が農村社会の生活向上にどのように結びついているのか、また、農村家庭が将来に抱く展望から、今後の農業のあり方にどのような展望をもっているのか、に着目した。以下は、インタビュー調査の結果をもとに森田班が検討を行った結果である。

2. 消費の動向と購入資金の行方

(1) バイク購入の推移

消費の動向を調査する時に必ず聞いたことは、最近の高額な買い物についてであった。この問いに対し、森田班のインタビュー調査と他班の調査の結果を総合すると、非常に多かったのがバイクである。調査団がインタビューを行った80軒中、実に48軒がバイクを所有し、計56台のバイクが購入されていた。あるインフォーマントの家庭に至っては、五人の子供全てがバイクを所有していた(Morita080316-1)。そして各年別の購入実績をみると、2001年から2004年にかけては1台～3台の間で横ばい状態であるが、2005年の8台を期に増加傾向に転じ、2006年に9台、そして2007年には18台、2008年も3月までですでに2台の購入実績がある。

このバイク購入推移は、これまでのバックコック研究におけるソムBのバイク購入戸数統計とほぼ合致している。バックコック研究の統計によれば、1995年に僅か4戸(123戸中)だったのが、2000年には17戸(146戸中)に増加し、当時の一台の平均価格は、1433ドル(約2150万ドン)であり、1990年代から2000年に至るバイクへの資金の投入は、およそ3億3000万ドンに上っていた。そして2005年の調査では、49戸(132戸中)と、一気にバイク所有戸数が増加していることがわかっている。

¹本節は2008年3月アジア農村研究会第16回調査実習レポート「ベトナム北部ナムディン近郊農村調査報告書」(2008年7月東京大学文学部東洋史学研究室内アジア農村研究会発行)28-31頁を転載したものである。転載にあたり一部表記を修正した。

また、バックコック研究に拠ると、ソム B でまず普及したのはテレビであり、90 年代以降に普及し、2005 年には 132 戸中 114 戸が所有していた。その次ぎが電気釜であり、2000 年以降に普及し、2005 年時点で 118 戸が所有していた。つまり、バイクは第三の普及品として位置付けることができるのである。なお、バイク購入が 2005 年から増えた理由としては、2004 年から安価なバイクが市場に出てきたことが一因であった。本調査結果においても、中古の中国製で 300 万ドンから、新品は 1000 万ドンから 1700 万ドンの間にあり、1500 万ドン前後が最も多かった。あるインフォーマントは、二、三年したらバイクを購入できると述べており (Morita080309-1)、工場労働者世代にとって、バイクはすでに手が届く高額商品として認識されているようである。

(2) 購入資金の来源

それでは、バックコックの家庭において、バイク購入の資金はどこから捻出しているのだろうか。各班のディスクリプションの記述をまとめると、工場労働者自身が全額自弁したと判断できる事例 (Semura080309-2,0310-2,Koganemaru0316-3 等) は少なく、多かれ少なかれ親の資金援助を受けており、むしろ親が出資する割合の方が多い。それは、購入バイク 56 台中、出資径路が掴める 41 台の内、親が全額出資していると思われる事例が 14 件あり、青年層の全額自弁の事例 7 件を大きく上回ることから明らかである。

そして親がどこから資金を捻出しているかという点、その主たる財源は農業である。農業による現金収入を得る方法としては、野菜の販売、豚・鶏の飼育・販売、稲の販売などのほか、農業運搬車の売却や農作業機械のレンタルが挙げられる。また、もう一つの財源は、子供が工場労働で得た給与から親に渡した分の貯金であった (Koganemaru080314-1,Morita080314-1)。二世帯同居の場合、インフォーマントで給与の半程度を親に預ける者もあり、主として家計の管理が親と妻にあることがわかっている。

(3) 農作業機械の購入について

本調査によると、親世代はインフォーマント世代の子供に対する投資はするが、本業の農業に対する資金の投入はほとんどなく、むしろ子供のための資金捻出に農業運搬車を売却するほどである (Morita080315-2)。さらに、ハンドトラクターは新品でもバイクの半額で購入できるにも関わらず、2008 年 3 月現在、バックコックのハンドトラクター台数はソム A で 4 台、ソム B で 5 台しかなく、ソム A で初めて購入したのは、1987 年のことであるから、20 年以上が経ちながら、ほとんど普及していないのが現状である。

その理由として、現状で食べていける生活ができているという事がある。それゆえ、あえて機械を購入する必要がなく、レンタルで充分であるとの見方が強い。むしろ農業の効率化よりはインフォーマントが工場通勤に使うバイクの方がよほど大事であるという考えだと思われる。

3. 子供への投資・願望

このように、バイク購入から農村の消費活動を見てみると、二世帯或いは三世帯家族の場合、親は農業、インフォーマントは工場勤務し、インフォーマントは給与の一定割合を親に渡し、残りを貯めてバイク等に投資する。そして親の方は、自らの農業収入とともに、子供から受け取った給与を貯金しておき、農業の効率化よりも先に、子供が必要な時にそれを元手に出資してあげるという流れが見えてくる。

かくも子供に投資する親世代に共通するのは、子供に農業から逃げてほしいという願望であった。その言葉の理由を聞くと、その答えには、農業はきつくて低収入であり、子供には継がせたくはないということ。工場勤務は毎月一定の現金収入が得られるということ、子供には学歴を積んで、大学または専門学校に行つて欲しいという事であった。

また、将来についてインフォーマントら子供世代に聞いてみても、離農して、工場に勤め、一定の現金収入を得られる道を希望する言葉を多く聞いた。こうして二世帯の考えに共通しているのが、現金収入の確保と、離農への流れである。

4. 農業の行方

そこで、インタビューにおいて、農業をしないで、どうするのかと尋ねると、人に田畑を貸して農業をしてもらおうという、農業委託の話が出た。そもそも土地は合作社によって口数によって均等に配分されている。この土地分割が将来も変わらなければ、農業を委託して、食べていけるだけの米が得られるのならば、十分にやっていると考えられる。また、農業委託で米が得られるとなれば、現金収入獲得の道を進めば良い、ということになる。

さすれば、現在二世帯同居の場合、親が農業をして、子が工場勤務をするという分業体制をとる家族は、余剰収入への願望がさらに高まり、もっと豊かになるために、現金収入を得る方へもっと流れることが予想される。一方、若年夫婦の核家族の場合、平日は共働きで工場に勤め、週末日曜農業をするという生活にならざるを得なくなる。あるインフォーマントは、夫と息子二人の四大家族で、出産・育児休暇中であったが、まだ子供が幼く、周りに助けてくれる間柄の人もいないため、仕事を辞めざるをえないと不安を抱えていた (Morita080310-1)。これでは自分たちで食べていけるのがやっとならぬとあり、もっと豊かになるためには、その子供達が大きくなり、現金収入を確保できる工場労働などに従事するようになるまで待つしかないのが現状である。

それでは、将来まで農業を継続していける見込みはあるのだろうか？その答えの一つは、農業への回帰であろう。工場勤務は一定の現金収入が得られるとはいえ、いつかは辞職しなければならない。その時には再び農業に戻り、代わりにその子供や孫が工場に勤務するようになっていけば、工場勤務と農業の両立がはかられる可能性も出てくるであろう。

5. おわりに

以上が最終報告会における班報告のまとめであるが、最後の結論が曖昧な展望に終わってしまっているのがどうにも残念である。これは、ベトナム農村について、バックコックについての見識が足りないとともに、班活動の中で、森田班としての調査の方向性に関する議論を尽くさず、遂にインタビューにおいて班員間で方向性の統一ができなかったことが原因ではないかと思う。この事は、班長であった私にとって、非常に残念で悔しいところである。

森田班は、メンバーの入れ代わりが多かったが、これは前からわかっていた事である。森田班の班員は、森田健太郎、内藤（真）、大久保、内田みどり、中川ふみ子、高須の計 6 名（敬称略）と、通訳のトゥエットさんとチャンさんである。班員の皆さんには、一緒にナムディン市街で迷子になったり、体調の悪い中頑張って遅くまで報告の準備をさせてしまったりと、班長としては迷惑のかけ通しであったが、それでも支えてくれたことに、良きメンバーに恵まれたことを嬉しく思う次第である。

そしてなにより、田植えで忙しく、かつ工場から帰宅したばかりにも関わらず、私たちの拙いインタビューに快く応じていただいたインフォーマントのご家庭の皆様およびコックタイン合作社の皆様に、心より感謝申し上げます。

第3節 2008年ナムディン調査勢村班報告：彼らは、「この村に住むこと」をどう考える？¹

勢村班一同

1. 勢村班の調査概要

勢村班は班長勢村かおり以下、日置文香、神康文、浦田の構成である。うち勢村は対象地域が異なるもののベトナム専門家であり、浦田はア農会調査継続参加者である。またベトナム側班員として、3月9日から12日まで Phuong(フーン)さん、13日から Dung(ズン)さんがベトナム語通訳および作業に協力くださった。当報告は彼女たちのベトナム固有の諸事情への精通に大きく拠っている。さらに当班には小川有子、新美達也両氏が現地およびデータ分析時に度々参加いただき、より有意義な調査ができた。

勢村班の聞き取り調査件数は、16である。これに加え各班の聞き取りを参照し、総計79件の聞き取りを本報告の分析対象とする。ただし、1件の聞き取りに複数人分の情報が含まれることもあるので、実際のデータ数はさらに多くなった。

2. 問題意識と本報告の目的

近年の工業区建設により若者(とくに女性)の職業生活が以前と比べ大きく変化したこと、しかし同時にその選択幅が非常に限定的であることは、桜井先生をはじめ多くのメンバーが指摘していた。ゆえに彼らの職業観は興味ある課題であったが、今回調査では様々な事情から触れられなかった。また、彼らには最終的な帰農ないし帰村願望(村外移転を希望しないという意味)が強いことも、桜井先生がすでに示していた。

さて、勢村班は聞き取りの締めを明るくすべく「将来の希望」を最後に聞くことが多かった(これも中盤以降はある事情で使えなくなったが)、幸運にも女性のインフォーマントや家族の他メンバーが同伴する聞き取りが多かったりした。そこで感じたのは、自らの子どもに対する希望の大きさだった。一般的にもベトナムの教育熱は非常に高いというし、工場勤めによって収入の増加した彼らが子どもへ夢を託すことは容易に想像できる。

本調査の目的は、工業化による村の発展・変化を知ることだった。また特色として、従来の中・高齢者ではなく、私たちと同年代の若者を対象としていた。したがって、ここまでの変化を確認するというよりも、将来の村の変化を担う彼らの意識を探ることに、調査の関心はあると考えた。彼らの現状を反映しつつ「希望」を窺い知るには、次世代への夢を聞くことが最適であるとし、勢村班は「工業化と“離農”の可能性について」と題した報告(3月18日、ハノイ)を行なった。本稿は、その論考をより発展・整理させたものである。

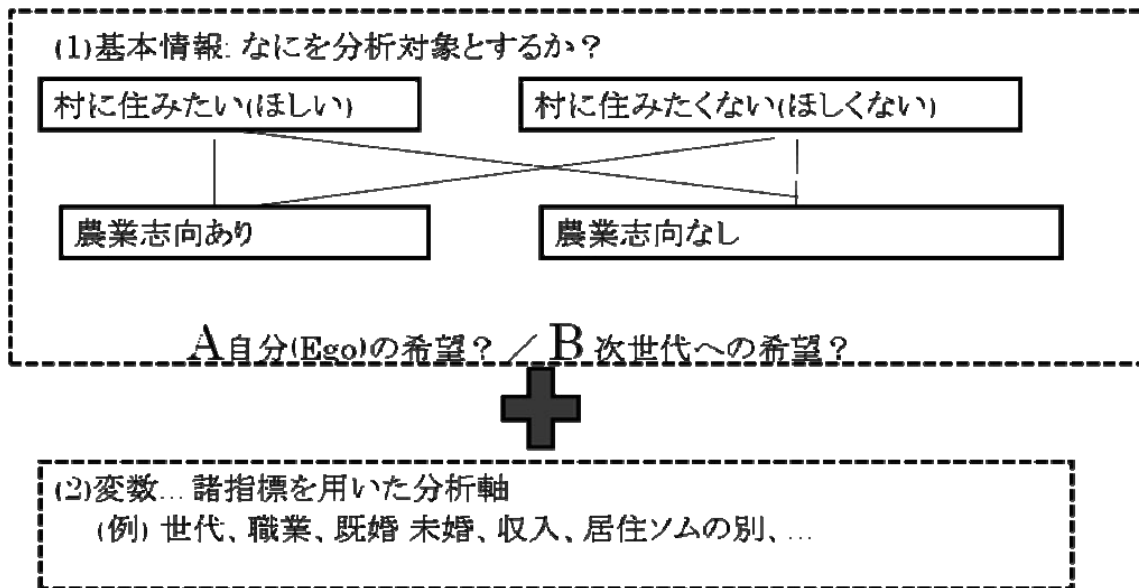
3. 統計データからみえてくること

聞き取りの多くで認められたのは、「子どもには農業をしてほしくない、継いでほしくない」という子世代への願いであった。

子どもたち(D1=90年代後半生まれ、S1=2000年代前半生まれ)には、農業をしてほしくない。よく勉強して、工場ではなく会社の仕事についてほしい(通訳注:ベトナムに進出している外国の企業の労働条件は厳しいので、普通の会社に勤めてほしいということのようである)。村には工場が多くなるといいと思う。(「若者が工場に働きに行くことで農業をやらなくなることについてどのように思うか」と尋ねると)答えるのが難しい。でも農業から得られる収入が多くなれば、続ける人もいだろう。(勢村班 0316pm2、女性)

この例が示唆するのは、職業として農業あるいは非農業を選択することと、村に居住または村外転出することは別の問題ということである。たとえば日本の高度成長期は、農村からの転出と職業選択はかなりの相関性をもっていたが、その感覚をベトナムに持ちこんではいけないようだ。

ここから私たちの分析は、第一段階として「農業をしたい(してほしい)」と「したくない(してほしくない)」の対照軸、および「村に住みたい(住んでほしい)」と「住みたくない(住んでほしくない)」の軸を準備し、それぞれの組み合わせを調べることにした。その結果を「基本情報」とし、様々なファクター(家系内での位置や収入、ソムの別、収入など)を変数にとらえ関連を示していく。これが第二段階である。当然ながら、聞き取り対象者=若者世代自身の希望と次世代=子ども世代への希望は分けて考え、比較の材料とする。



(1) 基本情報

A. 若者世代=「自分たち」の将来希望。

| | | | |
|--|-------|---------|--|
| | 村に住みた | 村に住みたくな | |
|--|-------|---------|--|

| | | | |
|----------|------------|----------|---------------|
| | い | い | |
| 農業をしたい | 11 (28.9%) | 0 (0%) | 11 (28.9%) |
| 農業をしたくない | 24 (63.1%) | 3 (7.9%) | 27 (71.0%) |
| | 35 (92.1%) | 3 (7.9%) | 38 例 |

B. 子ども世代=次世代への将来希望。

| | | | |
|----------|------------|-----------|---------------|
| | 村に住ませたい | 村に住ませたくない | |
| 農業をさせたい | 5 (26.3%) | 1 (5.3%) | 6 (31.6%) |
| 農業させたくない | 9 (47.3%) | 4 (21.9%) | 13 (68.2%) |
| | 14 (73.7%) | 5 (26.3%) | 19 例 |

縦に見ていくと、現在の若者世代の大半が今後も村での生活を希望している反面、次世代に対しては、明らかな「村外志向」が表れている。一方興味深いのは農業に対する態度で、これは両世代でとくに変化は見られず、農業に対しては現在のところ否定的である。

会社で働く時間以外は、家で農業をしている。主な仕事はITの仕事であるが、どの仕事も一生懸命やっている。農業は副業である。でも農業は労働が大変なのに、収入が少ないのであまり好きではなく、やめたいと思っている。(勢村班 0313pm1、男性)

「会社で働く時間以外」に農業を行なうまたは手伝うと答えた人は多く、当報告でもデータの処理方法については解決できていない。ただ共通していたのは、農業は「収入が低いのに「きつい、大変」という意見であった。これは、子ども世代に対する意見でとくに多かった。ただし、70年代後半生まれの女性が「歳をとったら、体力的に大変だから(工場勤務を)40歳位でやめたい。また農業に戻り、野菜を作って市場で売るつもり。田舎ではそれくらいしかないから」(勢村班 0308pm1)と述べるように、昇給や熟練化のリターンが少ない工場勤務を彼らが続けるかは不透明であり(そもそも工業区が近年にできたため立証が不可能である)、「それくらいしかない」という農業に彼らが将来就く可能性は否定できないだろう。

(2) 変数1: ソムごとの統計

各ソムごとに集計すると、母数は少ないものの顕著な「地元志向」が、現在のソムA住人に窺われた。一方で、彼らは他ソムよりも農業に対する意識が低いと思われる。

ソム A

| | 村に住みたい | 村に住みたくない | |
|--------|-------------|----------|-----------|
| 農業志向あり | 2 (20.0%) | 0 | 2 (20.0%) |
| 農業志向なし | 8 (80.0%) | 0 | 8 (80.0%) |
| | 10 (100.0%) | 0 | 10 例 |

ソム B

| | 村に住みたい | 村に住みたくない | |
|----------|------------|-----------|------------|
| 農業をしたい | 7 (31.9%) | 1 (5.0%) | 8 (36.3%) |
| 農業をしたくない | 12 (54.5%) | 2 (9.1%) | 14 (63.6%) |
| | 19 (86.4%) | 3 (14.1%) | 22 例 |

ソム C

| | 村に住みたい | 村に住みたくない | |
|----------|------------|-----------|------------|
| 農業をしたい | 7 (36.8%) | 0 | 7 (36.8%) |
| 農業をしたくない | 9 (47.4%) | 3 (15.8%) | 12 (63.2%) |
| | 16 (84.2%) | 3 (15.8%) | 19 例 |

その他

| | 村に住みたい | 村に住みたくない | |
|----------|-----------|-----------|------------|
| 農業をしたい | 0 | 0 | 0 |
| 農業をしたくない | 4 (66.7%) | 2 (33.3%) | 6 (100.0%) |
| | 4 (66.7%) | 3 (33.3%) | 6 例 |

ソム A は外観の限りでも構えのいい家が多く、他のソムに比べて落ち着いた雰囲気があった。また桜井先生によれば昔から軍人、役人を多く輩出したソムという。このような性格が村全体におけるソム A の地位(の高さ)を示しているかは断言できないが、彼らに村志向の強いことは、村居住のインセンティブがすでに認識されていることを示唆する。ただし、農業に関しては他ソムよりも意識が低いという結果が出た。実際にソム A の彼らが何を仕

事とするのか、今後の変化に注目である。

一方、ソム B・C はほぼ同じ数値となった。たしかに、ソム A との変化に比べるとソム B・C 間の景観は変化ないように感じられる。ともに「村に住みながら、農業以外の仕事をしたい」という層が最大である。これは工場勤務の現状にあてはまるが、彼らがいつまで工場通勤を続ける(たい)のかデータが少ないため、若年労働力に工場から淘汰された場合の希望の調査と追跡は、これからの課題であろう。

(3) 変数 2: 末子、末子以外の意識差

末子相続が中心とされるベトナムの場合、村外居住や職業選択は末子かそれ以外かで差が出ると考えられた。ただし、親の住居ないし土地をそのまま受け継ぐとは限らないようである。「現在、F は S2 のために結婚資金を貯めている。S2 は最近恋人ができた。彼は今すぐ結婚したいと思っているが、両親はもう少し待って安定してからするべきであると考えている。S2 が結婚したら、その妻はここ（現在地）に住み、S1 夫婦は新しい家を建てる予定である。S2 夫婦も、う結婚後しばらく現在地に住んでから家を出ていく」（勢村班 0314am2。Ego=母親、1950年代後半生まれ。F=Egoの夫。S1=1980年代前半生まれ。S2=1980年代前半生まれ）

末子のとき

| | 村に住みたい | 村に住みたくない | |
|--------|------------|-----------|------------|
| 農業志向あり | 5 (31.3%) | 0 | 5 (31.3%) |
| 農業志向なし | 9 (56.3%) | 2 (12.5%) | 11 (68.8%) |
| | 14 (87.6%) | 2 (12.5%) | 16 例 |

末子以外のとき

| | 村に住みたい | 村に住みたくない | |
|--------|------------|-----------|------------|
| 農業志向あり | 3 (20%) | 0 | 3 (20%) |
| 農業志向なし | 10 (66.7%) | 2 (13.3%) | 11 (73.3%) |
| | 13 (86.7%) | 2 (13.3%) | 16 例 |

母数の少なさが問題ではあるが、居住地については末子とそれ以外での差はなく、職業選択面で末子の農業志向が若干高いことが示された。

4. 結論と課題

以上のデータを踏まえると、現役世代すなわち工場に通勤する若者たちの一般的な将来像は「村に住むが、農業はできればしたくない」であろう。これが、工場勤務継続を意味するのか村内での非農業職への従事を示すかは不明である。しかしすでに休日の副業として農業を行なっている、ないし親の手伝いしている等の事例は多く、工場の若者に農業の知識が皆無ということではないようだ。また、村内中高齢者の職業が農業に限られていることもある。しかし、農業に対するポジティブなイメージはついで聞かれなかった。工場勤務による(とくに女性の)現金獲得は、調査メンバーが広く目にしたように、バイクをはじめとする家財の充実をもたらした。同時に支出も増えたので、貯金ありと回答するインフォーマントは少ない。

しかし、子どもに対する教育熱はいずれの親にも窺われた(独身でも、聞くと将来の計画をもっている場合があった)。彼らは農業を「きつい」「収入が少ない」とし、子どもにしてほしくないと考えていることが多かった。

そこから予想できる路は2つだろう。第一は、彼ら若き親と同様に近隣の工業区に、村から通勤する場合である。第二は、ベトナム地方部の教育・経済事情からすると非常に困難と聞く、都市の大学からホワイトカラー職に就き村を離れる場合である。後者には親の収入が重要となるが、本報告では残念ながら収入と職業選択・居住地についての関係を考察することができなかった。他にも、親(若者)の学歴や工場勤務への満足度、家族構成など、彼らと子どもの「将来」を左右するファクターは大量に存在するはずだ。諸要素の連関を丹念に分析できたとき、いまは数字の固まり＝統計でしか見えていない彼らの将来像を、より個別的に知る手がかりとなるかもしれない。

¹ 本節は2008年3月アジア農村研究会第16回調査実習レポート「ベトナム北部ナムディン近郊農村調査報告書」(2008年7月東京大学文学部東洋史学研究室内アジア農村研究会発行)32-37頁を転載したものである。転載にあたり一部表記を修正した。

第4節 2008年ナムディン調査梅村班報告：青年はなぜ工業区へ？

—青年と工場勤務、農業、農村¹

光成歩

1. はじめに

本調査の大テーマは、ナムディン省に2003年に操業を開始したホアサー工業区が、近在農家、とくに工業区に投入される若者の生活にもたらした変化を探ることである。ホアサー工業区のなかでも2008年3月8日から16日までの調査対象者111人のうち69人が縫製関係工員²であった。そのなかで、他の国営工場に比べ給料が低い³にもかかわらず、多くの若者が外資系大手の縫製工場で働いている。梅本班では、青年たちにとっての工場勤務の意味を、調査で見出された三つの特徴に注目して考察した。①青年の可処分所得の発生、②農家の家計との関係、③高学歴化、の三点である。本稿では、ホアサー工業区の設立以降を農村生活の「工業化」の時期と捉え、以上の三点について「工業化」以前と以後を比較しながら議論を進める。

2. 青年の自己決定志向

まず、青年の給料の使い道である。給料の一部は親に渡しているが、金額は一様でない。全額自主管理する（親には預けない）と答えた人の方が全額親に渡す人より多い。親に渡す額は、給与の3分の1程度から8、9割まで触れ幅がある。自分の使い道としては洋服代⁴、携帯電話料金、バイクのガソリン代など、青年自身の可処分所得が大きいことに注目した。「工業化」以前には独身者（とくに女性）は市場での野菜販売の手伝い、農業の手伝いに従事し、結婚してはじめて親の家計から独立した。しかし、「工業化」後は独身青年にも安定した額の可処分所得が生まれたのである。

インタビュー時、青年たちはピンク、ブルーといった色鮮やかな洋服を好んで着用していた。余暇をどう過ごすかという質問に対して「親の農業を手伝う」という返答が多かったものの、「買い物に行く」「バイクで出歩く」といった消費傾向・活動範囲の広がりをおぼせるような返答も見られた。

また、工業区の成立は、それ以前の都市に働きに出る⁵か、そうでなければ親の農業を継ぐしかないという状況を変えた。インタビューでは青年・親ともに農業を継ぎたくない・継がせたくないと答える割合が高い。つまり、選択肢がほかにあれば農業を継がないという青年たちの意思に、工業区の存在が合致する結果となっている⁶。「工業区」が青年たち

¹ 本節は2008年3月アジア農村研究会第16回調査実習レポート「ベトナム北部ナムディン近郊農村調査報告書」（2008年7月東京大学文学部東洋史学研究室内アジア農村研究会発行）38-40頁を転載したものである。転載にあたり一部表記を修正した。

² 大手外資工場、国営中小規模工場の両方を含む。

³ 月給平均808500ドン、手取り月平均615000ドン。

⁴ ただし買い物の頻度は多くない。一年に上下2-3セット以上購入している人はいなかった。

⁵ ハノイには車で2時間程度。通勤は不可能。

⁶ ただし、農業を継ぎたくない、子供に継がせたくないというインタビュー時の回答とは裏

に安定した現金収入をあたえ、またそのなかで青年たちの自己決定の領域が伸張するという連関が一部では見られた。

3. 全ての農家の家計に下駄を履かせる

すでに述べたように、「工業化」以前、農村の青年に開かれた就職の選択肢は都市・農村での伝統的雑業か、親の農業を手伝う／継ぐという二つであった。伝統的雑業とは、建築労働者、家具職人といった男性中心の肉体労働職である。よって、女性について言えば農業以外の選択肢はほぼなかった。伝統的雑業は工業区よりも賃金は高いが、収入は不安定で肉体的にもきつい。

「工業化」によって、それまで安定した現金収入に直結しなかった労働が意味を変えた。工場労働の大量雇用が、農村の青年たちに対し新しい選択肢を開いたのである。まず大量の女性が工業区で職を得た。女性は野菜の販売によって現金収入を得ていたが、季節や市場に左右されるという点でやはり安定的でなかった。男性にとっても女性にとっても、工業区での就職は高額でなくとも安定した現金収入を保障するという大きな意味を持っていたのだ。また工業区での就職が体力・技術面での振り分けを伴わない大量雇用だったので、青年を擁する家庭のほとんどすべてに、このような安定した現金収入への道が開かれることになった。

4. 高学歴化と労働市場

ホアサー工業区で働く青年たちの通学年数で最も多いのは9年（＝中学卒業、48%）、12年（＝高校あるいは専門学校卒業、37%）である⁷。学歴と給与の相関関係は見られない。つまり、青年たちは学歴に関係なく工業区での労働に向かっている。これは、学歴や専門性を求める労働市場が存在しないということである。

高い給与に結びつかないにも拘らず、多くの青年が高校進学を目指している。この背景には学歴や技能といった「免状信仰」の存在、さらにはそれによる学歴インフレの進行がある。子供の将来についての希望を若い親に聞くと、大学に就いて給料の高い仕事についてほしいという答えが返ってくる。ここからは、「高学歴＝高収入」をさらに進めた、「大卒＝高収入」という学歴と収入の相関関係が認識されていることがわかる。しかし、ベトナムの大学の数は極めて少なく、大学進学は日本のように全入時代といわれる状況からは想像もつかないような狭き門である。

このため、高校進学＝大学への1ステップという捉え方は必ずしも一般的でないと考えられる。むしろ、高校進学が農家の家計に打撃を与えないという、家計から見た高校の位

腹に、休日には親の農業を手伝う、既婚者であれば自身の土地で農業をすると答えた回答者も多かった。工業区での就職は日本的なイメージの「就職」とは違い、農業従事をかならずしも排除するものではないようである。今回のナムディン調査の参加者の多くが漠然と意識していた問いは、農業は継がれるのか、「希望」どおり放棄されていくのか、あるいはパートタイムの仕事として形を換えて農民の家計を支え続けるのか、というものであった。

⁷ 世代が若くなるほど高校・専門学校卒業率はあがる。

置づけを勘案する必要がある。高校の月謝はさして高額ではない。このような状況から、高校進学が一般化しつつある。すでに示したように、高卒者の割合は世代が若くなるにつれて増えており、高校進学一般化、高卒という学歴のインフレが急速に進行中であると考えられる。

5. 結論

本稿では、工業区ならびに大手外資工場での就業機会が農村の青年たちを大量に引き寄せた要因を検討した。これまでの議論をまとめると、青年にとっての工業区での就労の意味は以下の3点である。①青年の給与の自己処分を可能にした。②体力・技能・性別を振り分け基準とせず、「全ての」青年に安定した現金収入の可能性を開いた。③高学歴化に対応する市場不在の現状で雇用の吸収先となった。

農業を継ぐか、継がないかという「希望」と実現可能性の問題で言えば、青年たちの工業区での就業はむしろ「農村離れ」をかなりの程度減少させている。就職と月給獲得は、それだけで青年たちに「農業離れ」の一步を踏み出させているとはいいがたいのである。

第5節 2008年ナムディン調査光成・小金丸班報告：

社会的・経済的变化における価値観の変容についての考察¹

小金丸美恵

はじめに

一ヶ月前、極端には昨日と変わらない風景の中で今日を過ごすことが難しいという点で、2000年代後半の東京とハノイはよく似ている。「建設ラッシュと富裕層の増加」という二つの言葉が2008年のハノイを語るキーワードであることを、調査前に会ったベトナムの友人に教えられた。

今、手元に2007年4月4日付けのLao Đông 誌の連休中の国内・国外旅行の動向に関する記事がある。ベトナムで4月28日から4日間続いたその年の連休の過ごし方として、国内外の旅行を選択する人の増加が著しいという記事である。筆者がハノイに留学した2003年から2005年の2年間に、観光目的で国外旅行を経験したベトナム人は、知り合いに一人もいなかった。休日の娯楽としては、帰省が最も一般的だった。

本調査が実施された2008年前後、収入の増加、就労形態の変化、中間層の出現をはじめとして、ベトナムの経済・社会は過渡期にあり、大きな変化を遂げつつあった。

本報告は、北部ベトナムの社会的・経済的变化に伴い、調査地のナムディン近郊農村で調査時に進みつつあった農村の変容（端的には労働市場の変化）を前に、人々の価値観が変化しているのではないかと仮説の下、その内容と就業形態の変化との関係を探ることを目的とした班調査の結果をまとめたものである。

光成・小金丸班は、前半は光成歩を班長として、山崎、鋤柄、小金丸、通訳に Thu を迎えて活動した。後半は、小金丸を班長として、小川（絵）、山崎、鋤柄、通訳 Huyên で活動した。調査途中の班長交代という予期せぬ出来事、また後半班長となった小金丸の拙い指揮にも関わらず、懸命に調査に参加し、班としてのまとまりを維持してくれた班員に心から感謝したい。また、難しいベトナム語を日本語に直す努力を惜しまず協力してくれた通訳 Thu さん、Huyên さんにこの場を借りて感謝を申し上げたい。

経済状況と内面の満足

調査村は、2004年に近隣に工業地帯ができ、労働市場における変化が著しい。そのような背景をふまえて、今回の調査は「工業区設立による農村の発展」をテーマに、子世代である工業区で働く青年をインフォーマントとして行われた。しかし、報告書冒頭の団長の記述に見られるように、実際には調査途中で質問項目が変更になり、またインフォーマントも青年からその親の世代に変更になった。

聞き取りを行った世帯は、親世代はほとんどが農業に、子世代は賃金労働に従事してい

¹ 本節は2008年3月アジア農村研究会第16回調査実習レポート「ベトナム北部ナムディン近郊農村調査報告書」（2008年7月東京大学文学部東洋史学研究室内アジア農村研究会発行）41-45頁を転載したものである。転載にあたり一部表記を修正した。

た。賃金労働は世帯に現金収入をもたらす。給与は労働に応じて差があるので、収入には個人差がある。以前はほとんどなかった定期的な現金収入が生じ、また世帯収入にばらつきが出るという状況は、人々の幸福をめぐる感覚にどのような影響を与えているか。

以下の表1は、聞き取りの結果を、収入と満足に関して分野別にまとめたものである。

表1 (単位：ドン)

| | 月収 | 手取り/月 | 仕事への満足度 | 給与への満足度 | 生活への満足度 | 学歴への満足度 |
|----|---------|-----------|-------------------------|--------------|-----------------|--------------------------------|
| 1男 | 760,000 | 600,000 | 屋根の下で働けるし楽、時間ある | 満足しない「恥ずかしい」 | | 「恥ずかしい」(9年生) |
| 2女 | | 1,000,000 | まあ呑める仕事 他に選べない | 普通 | | |
| 3男 | 760,000 | 600,000 | お金がなく勉強も出来なくてこの仕事しかなかった | 低いが仕方ない | 普通の生活が出来ているから幸福 | |
| 4女 | | 1,200,000 | 同じ仕事ばかりでつまらない(一つの工程だけ) | — | | 友達は大学へ行っているのに自分は工員で恥ずかしい(13年生) |
| 5女 | | 1,200,000 | 子供と過ごす時間を持てる仕事に転職したい | — | 家族がお互い助け合っていて幸福 | |
| 6女 | 761,000 | 600,000 | 定年まで続けたい | 節約して初めて足りる | — | — |

我々は、当初、調査村の労働市場をめぐる変化は、何を幸せと感じるかという人々の幸福の価値観に世代間ギャップを生じさせ、若年層の間では経済的豊かさが幸福の指標になっているのではないかと想像した。しかし、3番の男性と5番の女性を比較すると、給与は60万ドンと120万ドンと2倍近くの差があるのに対し、どちらも生活は「幸福である」と述べている。また、4番の女性は、収入が最も多いインフォーマントの一人であるにも関わらず、全般的に不満をもつと語っている。結論として、収入と「満足・幸福」は、必ずしも比例しない。

当初の想定が否定される中、我々は、調査村の幸せをめぐる価値観は家族と暮らしているか否かに左右されるのではないかと考えた。聞き取りの中で家族という単語が使われる回数が多かったこと、また未婚のインフォーマントであっても親と住みたいと答える人の割合が高かったことなど、生活全般において家族を優先する傾向が見て取れたためである。幸福の指標が家族にあるという価値観は、社会・経済の変化に伴って近年現れたというより、むしろそれ以前からの根強いものと考えられる。調査村においては、当初我々が想像した経済的富を豊かさの指標とする若年層間の価値観の変化は調査時点では生じていなかったといえるだろう。

各世代の職業

では、以上にみた家族尊重の価値観は今後も続いていくだろうか。職業のあり方は、家族の形態に大きく影響を与える。我々の二つ目のテーマは、親・子・孫、それぞれの世代の従事する職業の現状と、それが今後どう変化し、価値観に変化を与えるかについての考察である。

前述のように親世代は農業、子世代は賃金労働という形態が、現在の村の労働に関する状況である。これに加えて、孫世代への希望として、データとして得られている6人の子世代の村民の中で3人が「農業は大変だから、農業以外の仕事に就いてほしい」と述べている。

孫世代が賃金労働に就くことが実現すれば、二世帯が賃労働に従事する世帯が誕生し、離農が進むことが考えられる。そうなれば、今の青年層である子世代は、賃労働に従事した最初の世代となる。しかし、調査世帯はすべて、食糧を自家栽培によって賄う。離農するなら、かれらは食糧調達のための資金を、賃労働によって稼がなければならない。現在の低い賃金収入のまま生活必需品全般を給与で賄うことは難しいように思われる。そもそも、聞き取りをした各世帯は、生活を全て給与で支えることは、考えていない。農業を職業と見なす人が少なく、「職業は何ですか」という質問に、たとえ農業をしていても「何もしてません」という答える人が多かった。かれらは、寝食と同じような生活の一部として、農業をしているのではないだろうか。そのような人々が、お金を出して自らの食糧を買うということが将来的にあり得るか疑問である。

次に、中間ミーティングで桜井顧問より話があったように、今後の調査村の農業のあり方として、農業の機械化が進み、これまで農業労働に従事するには体力的に難しかった老年層の人々が農業を担うようになる可能性がある。そうなれば、現在賃労働に従事している青年層の子世代は退職後に農業に戻り、その次の世代が賃労働に就いて、老年層=農業、青年・中年層=賃労働の構図が再生産されることが考えられる。そうすれば、今の青年層は、若い頃に賃金労働に従事した最初の世代となるだろう。

以上のことを、職業のあり方と家族の居住形態の関係から考察する。まず、離農した場合もしない場合も、村民が将来的に近隣工業団地の労働に従事する傾向が続けば、村民の多くが出稼ぎなど遠隔地へ仕事を求めることはないだろう。それは、かれらが通いで収入を得られることを意味している。そうであれば、家族は一緒に暮らすことができ、家族が一緒にいることこそが幸せという価値観を保ち続けることに、労働が障害となることはない。

おわりに

調査地のナムディン近郊農村における人々の価値観について、世代間にギャップが生まれ、若年層では収入の多さが幸福の指標になりつつあるのではないかという仮定は否定され、「家族と一緒に暮らすことが幸せ」という以前からの価値観が依然として主流であるこ

とがわかった。社会・経済の変化に伴って、農業への従事が主体であった就業形態は大きく変化の時にある。しかし、調査時に生まれつつあった老年層=農業、青年・中年層=賃労働の形態が再生産されれば、工業化の進展に伴う労働市場の変化が「家族」を基準とした幸福の価値観に変化を与えることはなく、むしろ補強する力となると考えられる。

第6節 2008年ナムディン調査報告：離農化・高学歴化と村の将来像の多様性¹

澁谷由紀

1. はじめに

バックコックの青年に離農傾向・高学歴傾向が生じていることは、調査団員全員が否定することがない調査結果であるだろう。著者はその圧倒的な2つの潮流の中においても、その潮流を生み出す原因や程度には多様性があり、さらに村民の描く村の将来は多様化に向かっているのではないか、ということである。本稿では、このような観点から、全班のインタビュー調査のデータを考察する。

2. 離農の原因の複合性

今回の調査で明らかになったのは、世代を問わず、ほとんどの村人の中で、青年たちに離農してほしい、という期待が共有されていることである。その第一の理由は、農業は重労働に見合う収入をもたらさない、ということである。農業をやめ、工場労働者となった理由について、8年生修了後農業を経て縫製工場に勤める3児の母は、農業は「1年中、太陽が照りつける酷暑の日も外で働かなくてはならないし、朝早く起きて夜遅く寝なければならぬ」ので「大変な上、収入が得られない」。また、「仕事が大変なためよく病気をした」。答えている。また、とりわけバックコックでは、現金収入を得るための野菜栽培が盛んだが、野菜栽培で収入を得る代償として、農民の負担は大きい。彼女の一家は、以前は稲以外の作物（マメ・ジャガイモ・ニンニク・サラダナなど）を育てており「大変だった」ために、現在は稲作に加えマメのみを栽培していると答えている。（梅本班3月10日2軒目）。

第二の理由は、農業は収入が安定しないことである。中卒後農業を経て、農作業の重労働のために病気にかかり、縫製工場に勤めはじめた1970年代後半生まれのある女性は、農業は大変である上、豊作・不作があり収入が安定しないと指摘している。（梅本班3月9日2軒目）同様に、「農業のみに従事した時代は、収入はそのときのシーズン、豊作か不作かによって異なった」と振り返る村民は多い。（梅本班3月9日2軒目）1990年代前半生まれの縫製工員の女性は、「以前若い人たちは仕事がなかったが、工業団地ができてから、若い人たちがそこで働くようになったので、親の世代は安心している」（森田班2008年3月8日2軒目）と語る。将来の夢は、「幸せな家庭を築き、職業が安定していること。」（梅本班3月8日2軒目）という青年の意見もあり、恒常的な雇用がある、ということが、村民にとって世代を超えて安心感を与えていることがわかる。

¹ 本節は2008年3月アジア農村研究会第16回調査実習レポート「ベトナム北部ナムディン近郊農村調査報告書」（2008年7月東京大学文学部東洋史学研究室室内アジア農村研究会発行）47-53頁を転載したものである。転載にあたり欠落部分を補い、一部表記を修正した。

工場労働が安定性のある職業だ、という見方を補強している第三の理由が、保険制度である。調査対象者のうち、複数のインフォーマントが、保険・年金制度を評価していた。7年生修了後農業を経て2006年から縫製工場勤務を開始した1970年代後半生まれの女性は、「工場働くメリットは、退職した後も保険がもらえること」であるとしている（勢村班3月16日午後1軒目）

さらに離農の原因として第四に挙げられるのは、市場経済化にともなう現金支出の拡大である。一部の村民は、「社会が発展して」「農業の収入では生活費を賄うのに十分ではない」（勢村班3月16日午後1軒目）と感じている。

第五の理由として挙げられるのは、耕地が狭いことである。1970年代後半生まれで、12年生修了後、兵役や高等技術学校、ハノイの印刷会社を経て2004年から縫製工場の検品員をしている男性は、「土地を両親から譲ってもらっているが、小さくて収入にならない」（勢村班3月16日午前1軒目）ことを、農業以外の仕事を選んだ原因としている。

一方、経済的要因ばかりが離農の動機ではない。工場労働を選ぶ第六の理由として、多くの青年たちが、「農業は大変で汚れるため縫製の仕事のほうが汚れないから」（梅本班3月14日2軒目、190年代前半生まれで9年生修了後農業を経て17歳の時に工場労働を開始した女性の母）と回答している。

以上の離農の原因について考察すると、離農を促進している基本的な要因は相対的な収入の高さや安定性であるが、他にもさまざまな理由が複合して工場労働を選択していることである。

3. 高学歴化と進路の多様性

離農と平行してあらわれているのは、青年の高学歴化という現象である。既に多くの参加者が報告している通り、「学歴が高ければ高いほど良い職につける *kinh tế hơn*（梅本班3月10日2軒目、1970年代後半生まれ、女性）」とする認識は村民の間に共有されている。「お金がないから、勉強ができなくてこの仕事しかなかった」（1970年代前半生まれ、男性縫製工員、光成班3月9日1軒目）という父母や兄・姉を見て育った青年たちは、高校、高等専門学校、中等専門学校や専門学校や大学など、制式学校、非制式学校を問わず、卒業証書を求めてさまざまな学校に進学する。ある男性は、9年生卒業後、個人事業主のもと建築労働に従事、奨学金を得て美術工芸学校へ通学した後、入隊、除隊後国営建築株式会社に勤務している。彼が美術工芸学校に入学した理由は、「第一に、卒業後、免状 *Bằng Chứng Chi*がもらえるため、就職に有利だから。第二の理由は、大学や高校、高等専門学校、専門学校（チュンカップ）は無理で自分にあっていると思ったから」であるという。しかし、彼は学歴の限界性を感じている。「将来の夢はたくさんあるが、言えない。夢があっても実現できるかどうかは別問題である。自分は中学出で能力に限界があるためである。農業は収入が高くないためあまりやりたくない。皆と同じであればそれでよい」（梅本班3

月 10 日 1 軒目) という。

現在、親世代が子世代に望む職業は、教師や意思といった専門職が多い。9 年生修了後専門学校で自動車修理を学び、現在は縫製業につく 1980 年代後半生まれの男性は、自分の子どもには、大学以上の学歴を手にし、「博士・教授になってほしい」という（森田班 3 月 13 日 2 軒目）。教師になってほしい理由は、「教師は安定していて、時間もたくさんつくれるから」だという（森田班 3 月 10 日 2 軒目、1980 年代前半生まれの女性）。また、1970 年代後半生まれの女性縫製工員は、「工業は農業より楽」としつつも、2000 年代前半生まれの息子には、「よく勉強して、工場ではなく会社の仕事についてほしい」（勢村班 3 月 16 日午後 2 軒目）と考え、学歴をホワイトカラーの職業につくための手段と想定する村民が多い。

今回の調査で明らかになった重要な点は、現状では村内の大学進学者はごく僅かとはいえ、男女ともに、少なからぬ村人が高校卒業後、大学入試を受験し、失敗している、ということである。その場合、専門学校に就職する（1890 年代前半生まれの男性、森田班 3 月 14 日 2 軒目）場合や、縫製工員になるケース（20 代前半女性、森田班 3 月 14 日 1 軒目）があり、必ずしも進学しなかった理由が家計の状況であるわけではない。これは、進学者数によって想定される以上に、バックコックで進学熱が高まっているという事実示す一方、ベトナムでは大学の絶対数が限られているという事情や、農村の生徒は勉学に不利である、という事情が想像される。大学受験に失敗した息子を持つ 1960 年在前半生まれの男性は、子どもたちが小さいころの成績は、「家計が苦しくて、そのためかあまり良くなかった」と考えている。（森田班 3 月 15 日 1 軒目）。

さらに学歴に関して注意しなくてはならないのは、子どもの希望に応じて、農業を含めた多様な進路の中から進路を選択して欲しいと願う親が多く、単純に大学進学や工員を評価していない親世代もいる、ということである。大学を卒業したものの、就職難により南部で木工業に従事した息子を持つ母親（1950 年代後半生まれ）は、「息子たちには、農業は大変で、食べて行くには大変なので、離農して、工員にでもなってほしい」とし、「結婚したら、その嫁も工員であればよい」と考えて工員であることを評価している（森田班 3 月 15 日 2 軒目）。一方、ある若い女性工員が 2 児に望むのは、「大学に入って、教員になること」であるが、自身の将来の夢は、「家にいて子供の面倒をみながら、村内でできる副業をする」ことであり、必ずしも工場勤務を理想的な職業とは考えていない。（梅本班 3 月 9 日 2 軒目）また、「体が丈夫でない」として父が反対しているのにもかかわらず、縫製業は「女の仕事である」として、重労働の造船業を選んだ。しかし、父は、将来は農業を継ぐだろうと予測している（梅本班 3 月 15 日 1 軒目）。複数の子どもに対し、それぞれ違った進路を取って欲しいと考える村民もいる。1950 年代後半生まれの女性は、第 7 学年修了後中部高原でコーヒー豆の仕事をする長男には、帰村と同居を望むが、「農業は大変なので、工場に勤めて」欲しく、9 学年修了後職工をしている次男には、「大きい会社に勤めてほし

い。そして、30歳ごろに、仕事をしている女性と結婚して」欲しいと望み、2名の孫には「技術を学んで、工業の道へ進んでほしい」と考えている。隣省生まれの40代後半歳の女性は、20代前半の息子に「25歳までに結婚して欲しい」と願っているが、「子供が生まれると生活が大変になるので、収入が安定してからにしてほしい」。一方、20代前半の娘にも、婚期は「25歳くらいが」よく、「たくさんの方が働いているから安心」なため、縫製業を続けて欲しいと願っている（森田班3月14日1軒目）。

4. 村人の考える農村・農業の将来像

それでは、農業専従の青年が減っている現在、村の農業は将来だれが担うのかについて、村民自身はどのように考えているのだろうか。この項で指摘しておきたいことは、離農や高学歴化という潮流が村民の間の共通した傾向であるのに対し、村民の考える農村・農業の将来像は、農民によって多様だということである。

一部の村人は、家族単位での完全離農を志向している。子世代が離農しつつあるなか、将来的に一家が農業を続けることができなくなっても「人を雇ってまで続ける気はない」（勢村班3月14日午後2軒目、1950年代後半生まれ、女性）。一家に農業の担い手がなくなった場合、耕地を小作に出すという将来像を描いている農民もいる。1970年代後半生まれの木工業を営む男性は、野菜栽培をする妻と生計をともにし、縫製工員である4人の妹に囲まれている。彼は実娘には医師や教師になることを希望し、「木工業による現金収入があればよい」し、「食料は市場から購入できる」と考えている。（勢村班3月15日午前1軒目）。1980年代後半生まれの女性で、ハノイの短期専門大学の3年生に在学するインフォーマントは、自身も農業に従事するつもりはなく、「現在所有している水田は合作社に返してしまうだろう」（東條班3月16日3軒目）と答えている。

しかしながら、インタビューから得た印象では、大多数の村民が、父母世代・祖父母世代が農業を続け、子世代が週末や農繁期に農作業を手伝うことで、家族単位では農業を継続すると考えている²。工員として働く、息子・娘や嫁などの子世代は、農繁期や日曜といった「農業を手伝って欲しい時に」「手伝ってくれるだろう」という感覚があるし、また、「工員の給料も高くないので、工員に加え、農業もする必要があるかも知れない」という感覚もある（森田班3月16日3軒目）。「仕事を続けながらも、農業は手伝うことができる」（東條班3月10日1軒目、1980年代前半生まれ、女性、縫製業）からである。実際、1970年代後半生まれの女性縫製工員は、バイクのマフラー製造に従事する夫と2人の子の4人暮らしだが、「農業は日曜日にしかしない」という（森田班2008年3月10日1軒目）。

しかし、家族単位で農業を継続する場合も、農業で収入を積極的に得ようとする家族と、

² 本稿では、子世代を主な調査の対象である、1970年代初頭から1990年代初頭に生まれた工場労働者の世代、父母世代を、調査の対象者の両親の世代、祖父母世代を、調査の対象者の祖父母の世代とする。

自給用の穀物や野菜を得られればよいとする考え、投入エネルギーを最小にした形態で農業を継続使用という考えなど、さまざまな姿勢が見て取れる。1960年代後半生まれ、7年生修了後道路建設の自由労働者をしている男性は、1980年代前半生まれの妻（ろうそく製造）とともに水田と畑を所有しているが、「野菜の植え付けは野菜価格の高いときだけ行い、低いとき畑は放置しておく。人をやとってまで農業はしない」。「野菜づくりをしても、1日10,000ドンにしかならないが、外に働きに出れば1日50,000ドンにもなる」からである（東條班3月16日2軒目）。

工業化により、離農傾向が進むことは村民の間で自明のこととして捉えられているが、農業の担い手が将来も確保されるのかされないのか、村民の意見は分かれている。「社会発展とともに、農業も発展するが、工業のほうが発展が速い」ために、「もちろん農業も発展するだろうが、若い人たちは農業に戻らないであろう」（1950年代後半生まれの男性）といった考えもある。しかし、農家の収入の上昇、機械化によって、担い手の問題は克服できると考えている村民もいる。1970年代後半生まれの女性縫製工員は、村の農業の将来の担い手は誰になるのか、という問題について、「答えるのが難しい」としながらも、「農業から得られる収入が多くなれば、続ける人もいるだろう」（勢村班3月16日午後2軒目）と回答する。また、また、「今は確かに大変だが」、「そのうち経済発展によって、農業を機械で行ない、もっと効率的になるはず」であり、農業を非農業の両立は可能になる」という展望を持ち、「畑は売らない」つमोरの村人もいる。（1960年代前半生まれの男性、森田班3月15日1軒目）。

実際、祖父母世代、父母世代の中には、子世代に高学歴を望みながらも、農業の継続を望んでいる。1950年代後半生まれのソム長の男性は、村の農業については、まず①この村はだんだん農地が少なくなっていく。②農地にいろいろな作物を植えてみても、なかなか能率が上がらない。また③肥料の値段があがった。④農業をしたい人が少ない。以上の4点から農業が困った状態になっている。この状態を改善するために、合作社と村の人が努力をすること、商品作物として他の植物を植えることが必要である、と考え、2000年代後半生まれの孫に大学進学を望みながら、「農業を続けてほしい」と望んでいる。（勢村班3月16日午前2軒目）

一方、離農は必ずしも、都市への移住を意味しない。多くの青年が、1980年代後半生まれで12年生修了後ホーチミン市の専門学校に1年通学した男性は、「ホーチミン市の学校に行ったのは賑やかな街で活気があるから」で、「みんな行きたがっている」という。しかし、将来の夢は、ナムディン市に美容院を開業することである。（森田班2008年3月9日1軒目）将来を農村で過ごすことを後押ししているひとつの要素は、都市における地価（土地所有権）の高さである。「ナムディン市の土地は高く、買えない。可能にならないかぎり、現在の家に住むしかない。お金があり、ナムディン市に行けた場合でも、ときどき村に戻りたい」（勢村班3月16日午前1軒目）。1980年代前半生まれのある男性は、9年生を修了

後、2年間ナムディン市で職業訓練を行い、ホーチミン市で金属化工業に就いたが、「実家から離れて寂しくなったので」帰郷し、ナムディンの造船会社に転職した（勢村班3月14日午後2軒目）。

さらに、当の青年たちにしても、青年期の離農イコール生涯の離農と考えているわけではない。1970年代後半生まれで9年生修了後、農業と育児を経て縫製工場に勤めている女性は、工場労働は大変なので、40歳くらいで退職し、「田舎ではそれくらいしかない」から、「野菜を作っていつ場で売る」ことを希望している。（勢村班3月8日1軒目）1980年代後半生まれで、専門学校卒業後ホーチミン市で1年間勤務し帰郷し、ナムディン市内で縫製の修理と機械の組み立てに従事している男性は、家庭内に「農業を将来継ぐ人はいない」ながらも、「60くらいになったら農業をしよう」と考えている（森田班3月13日1軒目）。離農してはいるものの、自分の人生における農業のウェイトのほうを高く評価している青年さえ存在する。1970年代後半生まれであろうそく製造工場に勤める女性は、「農業が生業であるので、工場には行けるときに行くという考えでいる」という（森田班2008年3月8日1軒目）。

5. 青年農民の将来像の多様性

以上、本稿では、離農・高学歴化・農業の将来といった問題に関して、それぞれの世代が村の青年や村の未来について考えていることを考察した。全班のインタビュー調査の内容全体を振り返って、著者が感じたのは、離農と高学歴化という強い2つの潮流が認められる中で、離農や進学という青年の進路決定、そして青年がつくりだしていく農業の将来、農村の将来に関しては、青年の自主性、個人のおかれた状況に応じた選択に任せようとする考え方が、祖父母世代・父母世代に共有されているということである。進路決定・結婚などに関して、「親が口出しをしないことが、現在のベトナムで一般的である」（東條班3月8日2軒目、1980年代後半生まれの女性）という。現在、祖父世代・父母世代の村民が村の青年たちに望むのは、「自分の頭を使って、現状を認識する」こと（1930年代後半生まれの男性、東條班3月14日2軒目）であり、工業化・現代化の波の中で主体的に新しい農村を建設することである。さまざまな副業はあるものの基本的に農業中心の生活を送ってきた祖父母・父母世代、もしくはだれでも工員となることで離農という選択肢が共有されはじめた父母世代・子世代に対し、1990年以降に出生した子世代、孫世代では、同じ村の農民でも進路にバラエティが生じることが予想される。

一方、子世代・孫世代の進路の多様性が、祖父母世代・父母世代を合わせた家族単位で見た場合、収入・生活レベル点で同様に多様性を生むのかどうかは、現状では未知数であることも指摘しておきたい。日本の農村研究においても、工業化にともない、農村の構成員

すべてが同じような就業経歴を取るわけではないことが指摘されている³。村民自身がすでに予測しているように、機械化によって兼業農業が容易になること、工員の昇給速度が遅いこと、離農しても食料は確保しなくてはならないこと、村落への愛着心があること、とは、村民が、家族単位でどのような経済活動を行うのかに、複雑な影響を与える可能性がある。今回の調査においては、青年を直接の調査対象者にしたため、個人に焦点をあてたものになったが、今後はより、家族の単位でバックコック村を分析することが重要になると思われる。

³ たとえば石原豊美は、宮城県米山町で1985年、1987年に実施した調査から、農村成員の就業経歴とライフコースを調査した。彼女は、農村成員の就業経歴は、農外就労の経験を全くもたないか短時間の農外就労を経験したとしても基本的に農業に専従してきた「I. 農業専従一貫型」、農業を主とする就業形態を維持しながら、農業専従から農業と農外就労との兼業へ就業形態を転換した「II. 臨時的農外就業付加型」、農外就業を主とする就業形態から、農業を主とする就業形態に転換を遂げた「III. 農外→農業中心転換型」、しばしば紆余曲折を経て安定的な農外就業先を獲得した「IV. 安定的農外就業獲得型」、主として高校を卒業した後農業以外の仕事を見つけ、その仕事に専従するかその仕事と兼ねて農業に年間30日未満従事している「V. 農業就業中心一貫型」の5つの型に分類している。また、「農家家族は、成員が農外就業機会の出現、教育水準の上昇といった外的状況の変化に対応しようとする際の一つの調整機関である」と指摘している。(石原豊美、1996、『農家の家族変動：ライフコースの発想を用いて』東京：日本経済評論社。)

第7節 2008年ナムディン調査報告：紅河デルタ農村の就労状況の変化

—調査地・コックティン合作社区域における変化について¹

小川有子

本調査地では、すでにこれまでに桜井由躬雄教授を筆頭とする調査団によって、包括的な研究が行われてきた。報告者も98年より8年間、この調査に参加して主に人の移動について研究しており、今回のアジア農村研究会による調査は9回目の本調査地訪問となった。

今回は諸般の事情により、初日から3月11日までと参加は前半のみに留まり、フィールドでの調査に参加することができたのはわずかに4日間であった。3月8日から10日までの3日間は、調査団と同行して合計6件のインタビューに参加し、3月11日は特別に許可をいただいて単独で調査地に出向いた。

今回のアジア農村研究会の調査では、ナムディンの工業団地の労働者のみに焦点を当てている。工業団地は2003年から操業であるため、この新しい職場では就労者のほとんどが05年、06年から働き始めたばかりである。

20代ないし30代の特に女性が、野菜を作り売ることに使っていた時間と労力が、近隣における工業団地の出現によって、工場労働に用いられるようになった。これまでとは異なり、地域内に大量の給与所得者が生まれたことになる。ただし給与所得者になった本人を含む家族のいずれかのメンバーが農業を継続しており、村内で暮らす限り家族の最低限の食は確保されている。6件のインタビューの中には、家族の「嫁」の位置にあるインタビュー回答者が工場労働者になったことで、家族が農業労働者を必要に応じて雇うことになったというケースもあったが、その他の回答者の場合はいずれも労力の少ない作物に切り替えるなどして、家族内の労働力でやりくりしていた。

未婚青年男女（2件）の場合は、生活が可能であるなら村を離れてもよいが、兄弟のうち1人は必ず両親のもとに戻るとしていたり、南部に行きたいが両親が認めないとしており、2件とも村を出ることについては条件が許すならばかまわないとしていた。しかし実際には、まずは結婚して生活を安定させることが目下の課題であるともしている。既婚女性（4件）の場合は、夫にせよ自分にせよ今は互いに離れる予定はないとしていた。独身のうちは移動をいとわないが、結婚後は安定性を選択していると言える。

11日の単独調査では、主にフーコック集落を訪問した。調査地の他の集落と異なり、フーコック集落からは数多くの集落民が主に南部ドンナイ省ビエンホア市へ移住し、ビエンホア市の工業団地のいずれかの工場に就労して生計を立て、現地で土地や家を買ひ、戸籍をフーコック集落からビエンホア市に移籍し、当地にフーコック集落の同郷会を設立し、

¹ 本節は2008年3月アジア農村研究会第16回調査実習レポート「ベトナム北部ナムディン近郊農村調査報告書」（2008年7月東京大学文学部東洋史学研究室内アジア農村研究会発行）66-67頁を転載したものである。転載にあたり欠落部分を補い、一部表記を修正した。

完全な移住を図っている。

ビエンホア市から戻ってナムディン工業団地に就職するケースもある。なぜならビエンホア市では給与は故郷よりも高いが、農業に一切従事しない工場労働者として生活しているため、住居や食事などの生活費がかさむのに対し、故郷において自宅で農地から得る作物で自給しつつナムディン工業団地で職を得れば、給与が若干低くても生活費があまりかからず、生活自体に大きな差が出ないためだ。ただし今回の調査では、新たにフーコック集落からビエンホア市へ戸籍を移籍した例も見られ（4件）、ナムディン市郊外に工業団地が存在するにも関わらず、フーコック集落からの人口流出は現在も続いていることがわかる。

これまで報告者はビエンホア市への移住を農業からの離脱として捉えており、南部への移動は、移動を可能にする条件を持つ限定的なメンバーのいわば特権として考えていた。しかし今回の調査を経て、ドンナイ省への移住の決意はすなわち家族のもとを離れ、最低限の食の確保という安定性の担保を放棄する決意でもあることを認識することになった。

今回のインタビューでは、コックタイン合作社地域の人々、特に女性たちは、できれば残業をせずにすぐに帰宅したい旨を述べていたのに対し、あるインタビューでは、ビエンホア市の各工場では比較的残業代が高く、「数時間の残業で一日分の稼ぎがある場合もあり、工員たちは皆残業を好む」（11日）としていた。前者が農業と並行する形で生計を立てているのに対し、後者は生活のすべてを賃金で賄わなければならないことが、こうした意識の差を生んでいると考えられる。

先述の通り、調査対象地域では突如として給与所得者層が厚みを帯びた。未婚、既婚の20代・30代の人々にとって、今ようやく生計をめぐる選択の幅が多様化し始め、就労構造、経済活動は大きく変化しつつある。ベトナムの国家レベルでの変化は、ナムディンの工業団地のように彼らの生活に直接の影響を及ぼし、同時に彼ら青年層の経済活動が国家レベルでの変化を支えていると言える。

今回の調査を通して改めて、存在しているのに見えなかったもの、見てこなかったものが多数あることを痛感した。今後の様々な課題を突きつけられた調査であったと言える。

我々を快く受け入れてくださるコックタイン合作社の合作社幹部と社員の皆さんに心からの謝意を表したい。

第 8 節 2008 年ナムディン調査報告：生活の市場化と工業区¹

桜井由躬雄

課題

1994 年から始まった私のバックコック研究は、主として「食べるための経済 kinh te de an」と「稼ぐための経済 kinh te lay tien」の複合的構造をあきらかにするためにあった。1980 年代の後半から始まった農村のドイモイによって、農民がわずかながらでも現金を獲得し、消費する機会ができた。それはベトナム史上最大の生活革命である。人々は、衣服を買い、食品を買い、子供たちをより上位の学校に進学させることができた。すくなくとも、1990 年代、市場経済が急速にバックコックに浸透していく過程の中では、人々は、食べるための経済を主体とし、これにしがみつきながら、稼ぐための経済の比率を高めるために必死の努力をしていた。本報告では、2000 年代では、急速な市場経済化に対応して、稼ぐための経済がいかに変質していったか、そして 2003 年に成立したナムディン工業区が、この課題にいかに応えたかを考える。

1. 1995 年から 2000 年までの家計変化

1.1. 消費

1.1.1 衣類費用

1995 年のソム B 集落全戸対面調査によれば、1 戸あたりの年平均衣類の仕立て、購入数は 7.37 着であったが、2000 年にはこれが 16 着になった。衣料消費の量的な拡大が始まった。

1.1.2 食品

1995 年にはほとんどの食材は自給であり、月々の食品消費はほぼ 10 万ドン内外で、ヌオックナムなど調味料が中心だった。豆腐や油類はほとんど消費されない。なかでも、肉魚は、月 1 万 8,000 ドン程度で、例外的に宴席などで 10 万ドンを消費する家があったが、一般には 7,000 ドンから 1 万ドンにすぎない。食品支出には大きな貧富の差はなかった。2000 年の 140 戸対象のアンケート調査では、月平均 1 戸 18 万 6,000 ドンで、分布の中心は 10～20 万ドンにある。総額ではほぼ 2 倍に向上した。食品支出の中でもっとも大きいのは、肉・魚の消費の伸びで、月平均支出は 9 万 2,100 ドン、年 3.68 キロ以上が消費された。肉についてみれば、この 5 年間で個人あたり 2 倍の消費量になっている。食品支出で着目すべき

¹ 本節は 2008 年 3 月アジア農村研究会第 16 回調査実習レポート「ベトナム北部ナムディン近郊農村調査報告書」（2008 年 7 月東京大学文学部東洋史学研究室アジア農村研究会発行）111-124 頁を転載したものである。転載にあたり欠落部分を補い、一部表記を修正した。

点は、野菜の購入が顕著に拡大したことである。1995年には野菜購入農家は1例、それにもかかわらずに月1,500ドンにすぎなかった。野菜は徹底して自給食材であった。しかし、2000年では野菜購入農家は52戸、平均で月1万9,000ドンになる。農家が野菜を購入する時代になった。これはバックコックの商品農業である野菜生産がこれまでの都市市場から農村市場に拡張していったことを意味する。

1.1.3 医療費

医療費も拡大する。1995年では47例の平均で年12万ドンの薬を買っていたが、2000年で36万2,000ドンに達した。ナムディン、ハノイなどの病院の充実から、病人の入院例も増えた。250万ドン、900万ドンを支払った家族も出現した。

1.1.4 社会関係費

1995年から2000年にかけての大きな変化は、社会関係費の出費増である。総額平均では100万ドン近い額が支払われている。1995年では20~30万ドンにすぎなかった。

1.1.5 教育費

もっとも大きな変化は教育費の拡大である。今回の調査でも顕著な傾向が現れたように、一般に農家の親は、次世代が農家を継ぐことよりも、都会での給料生活者になることを望んでいる。離脱の唯一の方法が学歴である。90年代後半以降、農村での高学歴化が進んでいる。

2000年には、幼稚園への支出が1園児あたり平均33万ドンに達する。たとえば2人を通園させている例では年に83万ドンの出費である。義務教育である小学校通学費用も次第に上がり、平均学費は12万ドン、最高では25万ドンに達している。中学もほぼ同様であるが、文房具が10万ドン近くかかっている。

問題は高校以上である。高校は現在50%以上の進学率になっているが、ほとんどはヴァン県にある高等学校に通う。学費は中学の二倍以上であり、ほかに通学費や昼食費がかかる。総額では平均年74万ドンの出費である。

さらに2000年には高校を卒業してから、専門学校、大学に進学するものが3戸4人出現してきた。ナムディンに学校があり通学可能な場合は、学費他で50万ドンほどの出費で済むが、寄宿させると年300万ドンが必要である。この段階でもとくにハノイでは月40万ドンの仕送りが必要とされる。

1995年には教育費平均は、約17~20万ドンほどであったが、2000年には91万3,000ドンになっている。この上昇はもっぱら教育の高度化にともなっている。

1.1.6 電化関係

より大きな変化は、生活の電子化である。ソムB146戸のうち、2000年までには106戸が

テレビを所有していた。うち 31 戸は白黒テレビ、73 戸がカラーテレビであった。つまり全戸数の 50%がカラーテレビ化している。カラーテレビの 74%は 1994 年から 1998 年の 5 年間に購入されている。ビデオ化では 2000 年までに 30 戸がビデオカセットを所有している。

1.1.7 バイク

電化の先にはバイクがある。1995 年調査では 123 戸のうちわずか 4 戸がバイクを所有していた。2000 年には 146 戸中 17 戸が所有するにとどまる。1995 年以降に 13 台が購入されている。バイクは当時、平均 1,433 ドル、テレビの 10 倍もした。しかし、これまでまったく手の届かないはずだったバイクが 2000 年代には購入可能なものになった。

1.2. 農業収入

1.2.1 稲作

バックコックの農民たちにとって、稼ぐための経済への参加はきわめて難しい。農民たちの経済の基礎基盤は、依然として稲作である。バックコックでは 1 戸あたり 1 季平均 1900 キロの籾収穫がある。しかし、この生産のための公的負担と生産諸費は 207 キロ、約 102 万ドンもかかる。かりに全量を販売したとしても、必要経費を除いた純利益は 162 万 8,000 ドンにしかならない。稲生産は現金獲得手段としても意味はほとんどない。農民たちにとって稲作は、主作であり、どこまでの食べるための経済活動である。

1.2.2 ジャガイモ

商品化された農業の代表はジャガイモ生産だが、31 例の平均売り上げは、17 万 6,268 ドンであり、さらに赤字を計上していない農家にかぎれば、平均純利益は 14 万 5,123 ドンである。1995 年調査でも、19 例の平均収入は 14 万 631 ドンだったから、ジャガイモ生産は稼ぐための経済にまったく貢献していない。

1.2.3 養豚

養豚は大きな現金収入源である。2000 年では 1 戸あたりの平均販売収入は、1 戸あたり 222 万ドン、純利益 145 万ドンであった。1995 に比べ、頭数でも収入でも 2 倍になっている。養豚はたしかに、稼ぐための経済に大きく貢献している。

1.2.4 野菜生産

151 戸の回答例のうち、146 戸が野菜栽培農家である。このうち、134 戸の平均売り上げは年 160 万 7,676 ドンに達する。肥料代、種子代を控除した純利益は 140 万ドンである。ただし、野菜収入には家庭差が大きく、400 万ドン以上の収入をあげる農家が 8 戸も出現している。野菜は専門化しつつある。

1.3. 非農業収入

このように、農業部門では野菜と養豚が市場化に成功して、平均 300 万ドンほどの利益をもたらしているが、これでは、1995 年から 2000 年にかけての現金支出をまかなうことはできない。非農業収入の発展が必要である。しかし、その労働機会は、きわめて限定されていた。2000 年調査では、出稼ぎを含めて調査農家の 38%、57 戸が非農業を兼業している。90 年代に青年たちに開放された非農業労働市場は、(1) ハノイ、ホーチミンなどの遠距離出稼ぎ、(2) ナムディン、ニンビンなど近距離都市圏への通勤、(3) 村内雑業の三種がある。

1.3.1 自営商業

調査対象農家の 18.7%、28 戸が商業を営んでいると回答している。しかし、月に 100 万ドン以上の売り上げがあるとする肥料商・雑貨商を例外として、ほとんどの商売は、多くても月 20 万ドン程度の零細な収入しかもたらさず、多くの野菜と同じく、主婦の小遣い稼ぎ以上を出ない。

1.3.2 雑業

商業以外の雑業では肥料運送業（先の肥料商、雑貨商が兼業）が年に 600 万ドン、運転手が 420 万ドンの収入をあげる他は、おおむね建設関係労働者である。建築労働者の多くは日当であるが、2000 年代は、多くて 1 万 8,000 ドン、低い場合は 1 万 2,000 ドンであり、したがって年収は平均 139 万 4,900 ドンにすぎず、補助収入以上ではない。たとえば、ソム B の 1980 年代前半生まれの男子青年は、年に 5~6 ヶ月、ナムディンの建築現場に雇われるが、朝 6 時半ごろ出かけて、夜 7 時まで働く。日給は 1 万 4,000~5,000 ドンくらいだが、昼食に 3~4,000 ドンもかかり、持ち帰れるお金は少なく、家にお金を入れることはできなかった。鏡製作の職人でも年収で 240~360 万ドン程度である。同じく、準公務員でも待遇は同じようなもので、タインロイ社の医療センターに勤める医療助手は年収 216 万ドンである。

非常勤職は、青年労働者といえども到底主職にはなりえない。

1.3.3 常勤

運良く常勤の職場に通えれば、条件はずっと良い。小学校教員は 450 万ドン程度である。ナムディンの企業に勤める例では、最高は電気ポンプ工場の工員で年収 720 万ドンの例もあるが、多くは 300 万ドン~500 万ドンである。たとえば、ある女子工員は小学校卒業の学歴しかないが、タインナム繊維工場で流れ作業のパートを担当して、月 40 万ドンを得るし、その夫は、同じタインナム工場で、アイロン掛けの仕事をして、月 50 万ドンを得る。常勤の職場には必ず定年制があるが、同時に社会保険も医療保険も揃っている。常勤職は夫婦

共稼ぎや、家が村にあることなど、いくつかの条件をクリアすれば、有利である。ただし、2000年段階では、労働市場はほとんどなく、ナムディンの民間企業への通勤者は15例しかない。

つまり、1995年から2000年にかけて、バックコックに市場経済の大きな波がかかり、消費生活が多様化した。それに見合う稼ぐための経済の発展は遅い。

2. 2005年調査

バックコックプロジェクトは、2005年に第三回のソムBアンケート調査を実施している。

2.1. 消費

2.1.1 衣服

2005年8月の調査の1週間前に、衣服類を購入したかどうかという設問に対し、40戸が何らかの被服を購入している。うち、1～3万ドンの購入者が20戸、5万ドン以上が8戸である。なかには80万ドン以上の買い物をしている家が出現した。平均して年150万ドンが被服費に充てられる。所得の低い層でも、4倍程度に衣服消費が拡大している。

2.1.2 食品

肉魚の消費は拡大を続けている。どの家庭も1週間で3万ドンから6万ドンの肉魚を購入している。1ヶ月の消費は18万8,000ドン程度である。これは2000年調査における全食品総額と同額である。

①野菜

ほとんどの農家が1万ドン以下の購入をしているが、なかには6万ドンも購入している例がある。野菜は少額であるが、野菜を購入する習慣は完全に定着したといっている。

②麺

2005年調査では137戸のうち、61戸が1週間以内に麺類を購入している。平均では週8,000ドン強、年では19万ドン強程度の消費である。

③パン、菓子

2005年以前には、農民がパンや菓子を日常的に買うことなど、考えられなかった。ところが、2005年には、1週間以内にパン・菓子を最低で1,000ドン、最高では3万ドン購入する家が出現してきた。また酒・ビールの消費量も拡大している。最高では1週間に7万5,000ドン、酒・ビールを購入した例までである。酒類の消費は2000年の2倍になっている。

他にたばこの消費も大きくなっている。ただし、これらの嗜好品の拡大は日常レベルでの食生活の変化というよりは、宴席など社会関係費用の増大に伴うものだろう。

2.1.3 健康

薬品の購買、医療センターの払いなど、医療関係では 63 例の回答がある。1 週間以内では最低で 1,000 ドン、最高で 10 万ドン、平均で 2 万ドンが医療関係費用である。ただし、回答例の 57 例までは 4 万ドン以下である。全戸が 2 週間ごとに薬品を購入したとして、月 4 万ドンの平均支出としてよかろう。

なお石鹸の消費も一般化している。129 戸が回答し、1 週間以内に最低では 1,000 ドン、最高では 5 万ドンを購入に充てている。平均では 7,055 ドンである。ほぼ全戸が毎週購入している。月では 2 万 8,000 ドンになる。これも 2.8 倍の出費になっている。

2.1.4 社会関係費用

すでに、2000 年調査において、社会関係のための宴席費用が急速に増大していたが、この傾向は 2005 年調査では倍増されている。テト費用と宴席費用をあわせた額は平均で 181 万ドンになるが、これは 2000 年調査時の 99 万ドンの約 2 倍である。

2.1.5 高額商品

90 年代末からまず急速に普及したのは電気釜である。電気釜は 1997 年から 2004 年までの間に、全戸的に普及し、2004 年には先行するカラーテレビの普及を抜いた。ついで農民には夢でしかなかったバイクが、2002 年から急速に普及しだし、2005 年調査時では、40% 近い農家がバイクを所有するに至った。コンピュータや冷蔵庫も少しずつではあるが、普及がすすんでいる。

この他に、急速に普及し始めたのが電話である。1995 年に最初に個人の家に固定電話が敷設されてから、しばらく追随する家庭がなかったが、2000 年に 4 戸、2002 年に 1 戸、2003 年に 3 戸、2004 年に 3 戸、2005 年の 8 月までにすでに 3 戸と増え続けている。電話は、平均 150 万ドンの敷設費だけでなく、月に 5~6 万ドンの通話料、維持費がかかる。にもかかわらず、電話はいまや電化のシンボルである。

さらに携帯電話も 2001 年 1 戸、2003 年 4 戸、2005 年 2 戸の計 8 戸として次第に普及している。

2.1.6 教育費

高学歴化はめざましい勢いで進んでいる。高校生は 2000 年調査では 20 人だったが、2005 年調査では 33 人に、大学・専門学校は 4 人が 6 人になっている。そのほかの補充学校通学生も 0 人が 10 人になっている。この結果、学費の負担も激増し、2000 年に比して約 2 倍前後の増加となって家計を直撃している。寄留の場合、ホーチミン百科大学の学生には 900 万ドン、ニャチャン大学には 800 万ドン、ヴィンフック師範大学には 800 万ドンなどの仕送りが必要となっている。

2.2. 収入

2.2.1 野菜

2000年にすでにみられた野菜需要の拡大は、価格の高騰として現れる。117例の平均で売り上げは511万ドンにのぼり、2000年（160万7,700ドン）の3倍をこえている。生産諸費の増大にもかかわらず、また生産面積が変わらないにもかかわらず、野菜収入は大きく向上し、家計における現金所得の拡大に大きく貢献している。

2.2.2 ジャガイモ収入

販売したジャガイモの売り上げは平均18万ドンである。2000年調査では、冬作ジャガイモの売り上げは、17万6,000ドンであったので、これも大きな変化はない。合作社管理のジャガイモは、2000年段階と同じく、合作社には大きな収入をもたらしているが、農民の現金収入には貢献していない。合作社管理のジャガイモはすでに、面積的に限界にきている。

2.2.3 養豚収入

2000年次に比べると、養豚農家が20～30世帯減少し、1戸あたり飼育頭数（新生子豚を除く）も3.86頭から、2.19頭に減少している。養豚は飼料、子豚の購入に現金支出が必要である。飼料代平均70万7,000ドン、子豚購入額平均94万ドン、その他3万5,000ドンの経費がかかる。この生産経費を売り上げから控除すると、224万7,000ドンになる。2000年調査では、豚肉の1戸あたり平均販売収入は222万ドン、支出は77万ドンで145万ドンの純利益があった。規模が縮小しているにもかかわらず、平均収入としては1.5倍強に増大している。

2.3. 非農業部門

ソムBの調査戸137戸のうち、商業従事者が18戸、それ以外の自営業、常勤、非常勤を含む非農業従業者は88戸、計106戸である。

2.3.1 商売

商業従事者は、16戸になった。しかし、規模は2000年調査時に比較して著しく大きくなった。平均月収では80万ドン（2000年調査では7例、平均40万ドン）と2倍をこえる。

分布でみても、100万ドン以上200万ドン未満が5戸もある。うち1戸は従業員の雇用まで始めている。

2.3.2 飲食店

2000年調査では、飲食店経営はNTC氏が、雑貨、野菜などとともに飲み物を守る茶店

giài khát を 1 軒経営している程度であった。しかし、2005 年には茶店を開く家族が 2 例ある。いずれもクエットタン通りに面し、月収 20 万ドン程度をあげている。家計補助としては少なくない額である

2.3.3 家具生産

バックコックの零細な手工業も、2005 年には経済的な意味を拡大している。手工業収入の回答例がいちじるしく増加した。業種的には、家具製造業が、最高では月 75 万ドンもの収入を得るようになった。

2.4. 通勤型常勤職の出現

2000 年から 2005 年の間のバックコック労働市場でもっとも大きな変化は、2003 年暮れに設立され、2004 年から本格化するホアサー工業団地の建設である。

2.4.1 雇用の拡大

2003 年までは年間 1～2 人の雇用しかなかった工業団地労働者が、2004 年には 9 人、2005 年 8 月までに 8 人が新しく雇用された。

2.4.2 縫製工

5 家族が機械生産、18 家族は縫製工である。工場労働者の平均月収は 73 万 3,000 ドン、縫製工は 56 万 9,000 ドンである。建設労働者の場合には、3 万 5,000 ドンから 4 万 5,000 ドンの日当と残業手当がつく。残業を加えると月 100 万ドンを越える労働者が出現した。

以上、2005 年には、消費の拡大に対応して、通勤型常勤労働者の増加という新しい稼ぐための経済活動が始まっていた。

3. アジア農村研究会 2008 年調査

3.1. 基礎情報

2008 年アジア農村研究会は、バックコックのソム A におけるホアサー工業区設立の意味を調査した。調査対象者については、コクティン合作社の推薦、紹介に依った。

3.1.1 調査対象人数

調査対象人数は以下のとおりである。

| 出生地 | 男 | 女 | 計 |
|----------|----|----|-----|
| A | 9 | 10 | 19 |
| B | 16 | 14 | 30 |
| C | 17 | 20 | 37 |
| DLT | 3 | 7 | 10 |
| Trai Noi | 0 | 2 | 2 |
| ほか | 2 | 6 | 8 |
| | 47 | 59 | 106 |

3.1.2 調査対象年齢層

調査対象年齢層は以下のとおりである。

| 生年 | 男 | 女 |
|----------|----|----|
| 1950年代前半 | 1 | |
| 1970～74 | 3 | 1 |
| 1975～79 | 7 | 14 |
| 1980～84 | 22 | 21 |
| 1985～89 | | 21 |
| 1990～94 | | 3 |

調査対象者のほとんどは 1980 年から 89 年生まれに集中している。文字通り青年労働者の調査である。

3.2. 家族

調査者の家族構成は以下のとおりである。

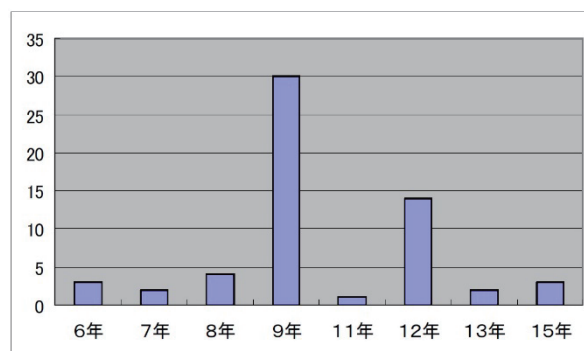
| 家族の人数 | | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 |
|-------|----|---|---|---|----|----|---|---|
| 男 | 既婚 | | 2 | 2 | 3 | 6 | 3 | 2 |
| | 未婚 | | | 6 | 15 | 3 | 1 | 1 |
| 女 | 既婚 | | | 4 | 9 | 8 | 3 | 2 |
| | 未婚 | 1 | 1 | 1 | 11 | 15 | | 1 |

もっとも多いのは家族もちの未婚男性、未婚女性である。

3.3. 労働力

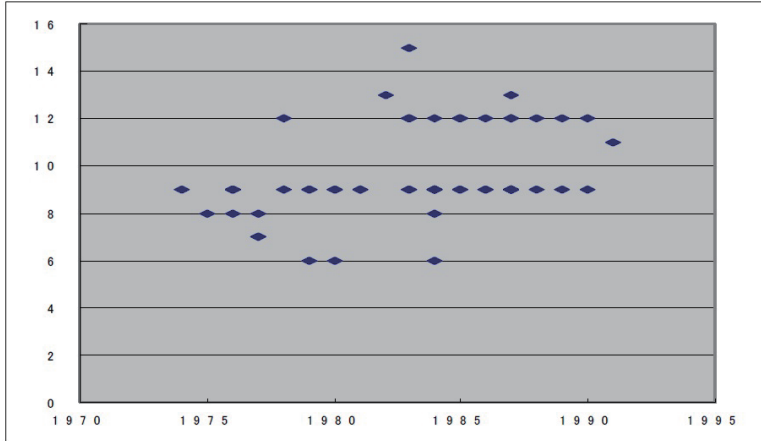
3.3.1 学歴

女性労働者の学歴は以下のとおりである。便宜上、専門学校、技術学校の学歴は省略している。当然、中卒、高卒にピークがある。

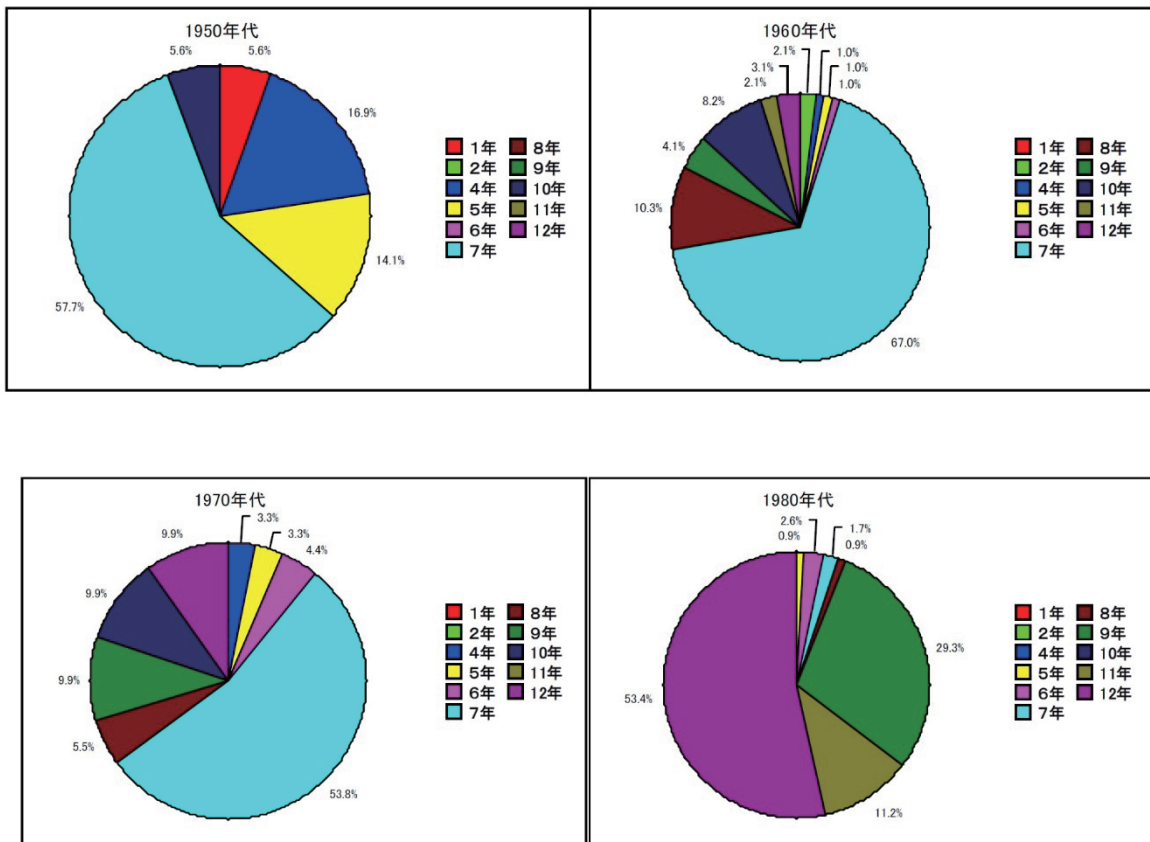


3.3.2 年齢と学歴

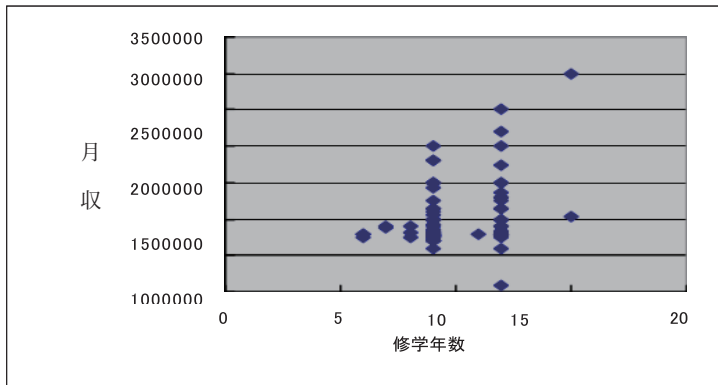
これを年齢別に分類しなおしたのが以下の表である。



これによると、1983年以前の生まれと以降の生まれで女性の学歴に大きく差がでてくる。これ以前の女性に高卒、つまり12年就学者はほとんどいないが、83年生まれ以後の女性では半分以上が高卒である。1998年ごろに、女性の進学志向に大きな差がでてきた。そして半分以上を高卒がしめる相対的高学歴女性の就職の受け口が、この工業区である。



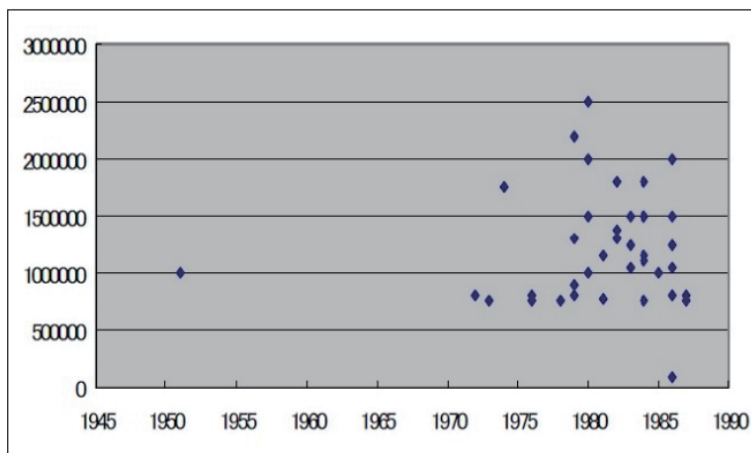
3.3.3 学歴と報酬



しかし、学歴と収入の間にはほとんど相関関係はない。わずかに3例のみが修学年数と比例する収入をもっているが、ほとんどは修学年数にかかわらず、収入分布は一定である。

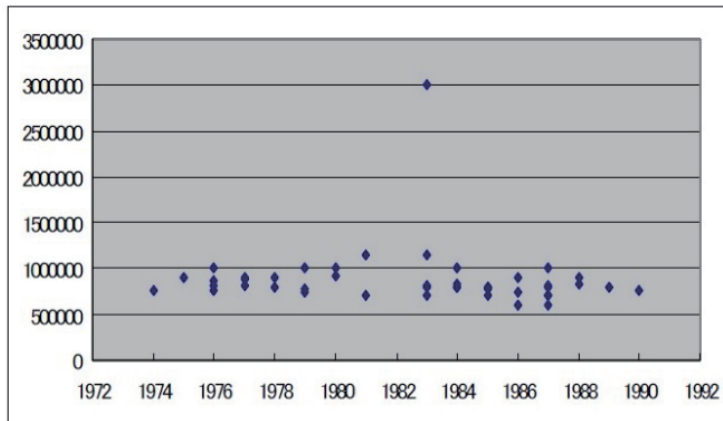
3.3.4 年齢と報酬

下表は、年齢と報酬の関係をみたものであるが、報酬は年齢にほぼかわりないことがわかる。つまり、報酬は学歴とも年齢ともかわりなく一定であり、ほとんど昇給がない実態がわかる。農村女性の側から学歴、年齢に対応した労働市場であるが、雇用者の側では、そうした個人差はほとんど考慮されていないことがわかる。

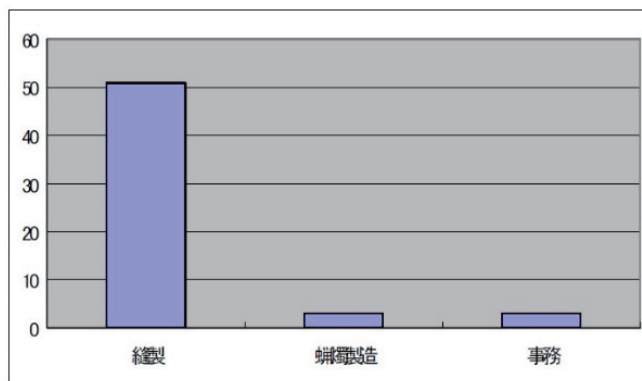


3.3.5 男性年齢相関

ただし、男性においても相関はみられない。男性は女性に比して、労働種別の多様性が大きいので、同年齢層内での給料格差は大きい。

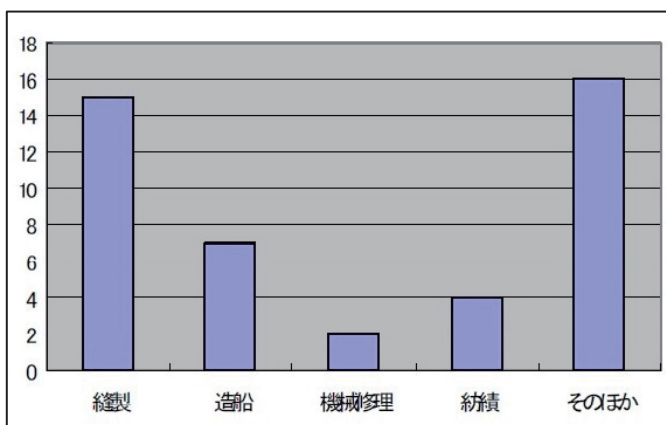


3.3.6 女性労働職種



女性労働の職種はおどろくほど限定されている。ほとんどは縫製で、ほかに別会社の蠟燭製造や事務がある程度である。

3.3.7 男性労働職種

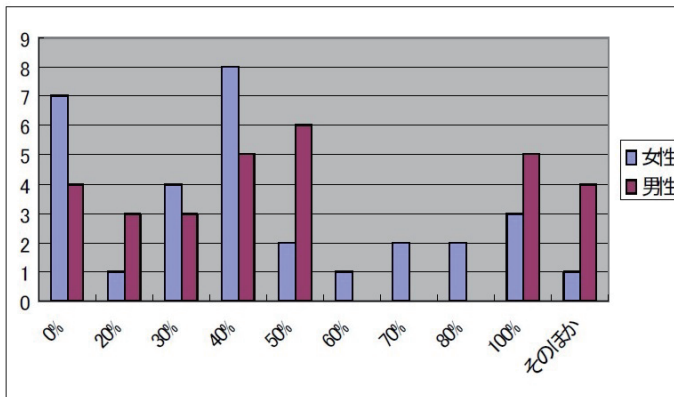


これに対し、男性の職種は縫製に集中があるものの、比較的多様性に富んでいる。

3.4. 家計と報酬

3.4.1 家庭への納付

従来の村落内雑業では月 30~40 万ドンがせいぜいであったものが、工業区では 70 万ドン、100 万ドンの収入が可能になった。しかも出稼ぎとちがって、食費も住居費もいらぬ額である。消費の最大は、家への納付である。



家への納付額は、多様性が大きい。あえていえば、女性は収入の 3~4 割以上を実家に納入するが、男性は半分以下を納付するグループとほぼ全額を納付するグループに分かれる。おそらく、独身者と既婚者で行動パターンが違うのだろうが、そこまでは調べていない。平均して、収入の 40% はそれぞれの家庭に納付される。

3.4.2 社交費

| 生年 | 性別 | 既婚/未婚 | 交際費 |
|----------|----|-------|--------------------|
| 1970年代後半 | F | (既婚) | 150,000 |
| 1980年代後半 | F | (未婚) | 200,000 |
| 1970年代後半 | F | (既婚) | 1,000,000 |
| 1980年代前半 | M | (未婚) | 300,000/回 |
| 1980年代後半 | F | (未婚) | かなりある |
| 1980年代前半 | F | (未婚) | 月による。最大724,540ドン以上 |
| 1980年代後半 | F | (未婚) | 年間500,000ドン以上 |

衣類はほとんど購入していない。青年らしい趣味にあてる余裕はないようだ。社交費も少ない。インタビューでは 7 例が社交費について情報提供する。年に 100 万ドン、70 万ドン、あるいは 1 回で 30 万ドンとする情報がある。1980 年代後半の層の一部では、一家の命日儀礼に多額の費用をその父母に納付する場合がでてきた。

休日はどうしてすごすかという問いに、ほとんどの青年たちは同村内の親戚や友人の家に行って過ごすという。実際、休日にはどこの家にも、近所の青年たちが集まって茶や菓子で時間を過ごしている。これは 90 年代とまったく異なっていない。

3.4.3 貯金

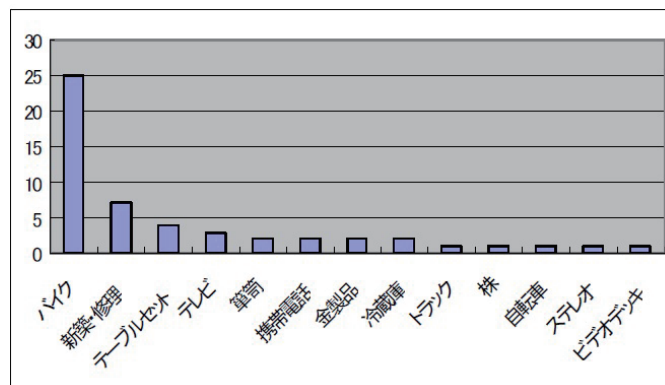
もっとも大きい「支出」は貯金である。貯金について回答のあった 19 例でみると、大きなばらつきがあるが、それでも最低でも月 20 万ドン、最大では夫婦で 175 万ドンという巨額、つまり月給のほとんどを貯金にまわしている例がある。先の家族納付金の場合も未婚者の場合は、親が貯金している例が多いようだ。とくに女性の貯金率がきわめて高い。

| 生年 | 性別 | 婚姻状況 | 貯金額 | 平均 |
|----------|----|------|---------------------------------------|-----------|
| 1980年代前半 | F | (既婚) | 月20万ドン | 200,000 |
| 1980年代前半 | F | (既婚) | 200,000-300,000(家族に渡すお金の中から家族の貯金として) | 250,000 |
| 1970年代後半 | M | (既婚) | 700,000-800,000 | 750,000 |
| 1980年代前半 | F | (既婚) | 夫婦で700,000-80,0000 | 750,000 |
| 1970年代後半 | F | (既婚) | 1,000,000 | 1,000,000 |
| 1980年代前半 | M | (既婚) | 1,000,000 (Wと合わせて) | 1,000,000 |
| 1980年代後半 | F | (既婚) | 1,000,000 (Egoと合わせて) | 1,000,000 |
| 1980年代前半 | M | (既婚) | 1,000,000 | 1,000,000 |
| 1970年代後半 | F | (既婚) | 1,000,000 | 1,000,000 |
| 1970年代後半 | F | (既婚) | 1,000,000-2,000,000/y | 1,500,000 |
| 1970年代前半 | M | (既婚) | 1,500,000-2,000,000/月 | 1,750,000 |
| 1980年代後半 | M | (未婚) | 300,000 | 300,000 |
| 1980年代後半 | F | (未婚) | 300,000—個人消費額 | 300,000 |
| 1980年代後半 | F | (未婚) | 約500,000/月 | 500,000 |
| 1980年代後半 | F | (未婚) | 500,000 | 500,000 |
| 1980年代後半 | F | (未婚) | 650,000 | 650,000 |
| 1980年代前半 | M | (未婚) | 1,000,000 (家族に預ける100万ドンのなかから生活費を引いた額) | 1,000,000 |

3.4.4 高額商品の購入

バックコックの青年たち、とくに女子青年は驚くほどに堅実な財政の中に生きている。その収入の大部分は、家庭への納付であり、貯金である。

では何をめざしての貯金か、結婚式費用を親が納付金から貯めている例が多いようだが、これをのぞくと回答者のうち 25 人が工業区収入からバイクの購入をしている。バイクは通勤の必需品とはいえないまでも、工業区への往復のいわば実用を兼ねたファッションである。ついで家の新築、リフォームだが、これも父母に対する一部負担である。テレビ、携帯電話ほかの青年らしい消費はごく一部に限られる。



結論 通勤型モデル

バックコックでは 1995 年から 2000 年にかけて、家庭経済の中に稼ぐための経済の影響が大きく浮上してきた。衣服、食品などが著しく多様化した。この傾向は 2000 年から 2005 年にかけて大きく加速する。もっとも大きな現金需要は、交際費と教育費である。交際費は村落内の社会関係の再構築であり、教育費は逆に離農、つまり村落からの離脱を目的としている。消費拡大は、村内秩序の維持と村落の解体という二面性をもって進捗する。

しかし、2003 年まで消費の拡大に対応する労働市場はなかなか発展しない。それが教育熱をさらに倍加させる。しかし、1998 年以降、男子のほぼ全員、女子の半数が高校修学という状況になっても、男女とも労働市場に改善はなく、極端な低賃金、不安定な村内雑業しかなかった。その低賃金と不安定な労働環境を支えたのは、合作社農業による「食べるための経済」部門の優越である。現金収入の多くが、村内の社会関係に消費されるゆえんである。市場経済の発展のもとに、大きく変化する社会と生活が、逆に既存の社会の安定さのみによって維持され、結果的に農村青年を雑業従事者のままに固定する。

たしかに少数者は遠距離に仕事を求めて村を出る。しかし、定職常勤の機会はなく、その収入は本人の生活のためだけに消費され、家族をもつことさえ難しく、結局、U ターンする。まれに定職常勤の幸運に恵まれたとしても、徹底した学歴差別のベトナムでは高校卒業程度では、生涯最低限の労働者であり、都会で家もなく、夢ももてない生活は豊かではありえない。なによりも、その低賃金では、故郷への送金はできない。つまり、故郷を切り捨て、故郷から切り捨てられることによって、都会で生活できる。これはドイモイ後の青年たちにとって、耐え難いストレスを醸成していたであろう。

2003 年に出現したホアサー工業区は、この農村青年労働力問題に関する一つの答えである。村落からわずか 7~8 キロの地点に、定職常勤の労働市場が開けた。もっとも重要な第一の点は、同年に徹底的に平等分割された土地制度のもと（桜井由躬雄「資源としての土地均分慣習—北部ベトナム・バックコックムラ調査より」内堀基光編『資源と人間』（『資源人類学 01』弘文堂、2008、299-344）に、一人あたり二期作水田 396 平米、畑地 48 平米、苗代地 43 平米の割り当てを受けていることである。平年作ならこの水田から 480 キロの籾が得られる。「食べるための経済」が、確固たる位置を維持していることである。同じく宅地と家は本人全員、もしくは親が所有している。そして、家と食事が確保されている。さらに合作社社員であれば、医療センターの検診や簡単な治療サービスが受けられる。

第二の点は、ホアサー工業区が通勤可能だということである。つまり、第一の生活インフラをそのまま享受して、近代市場部門に参加することができる。ホアサー工業区の賃金は最低賃金ぎりぎり、手取りでは、最低で月 60 万ドンにすぎない。村落社会の生活インフラがないかぎり、豊かな生活は望むべくもないが、しかし、この生活インフラを背景にした場合、個人によっては手取り給料のほぼ全額を貯金にまわすことも可能なのである。たしかに、青年たちには低賃金は大きな不満である。しかし、2003 年以前は工業区の給料の半分を稼ぐことさえ難しかった。そして遠隔地に出稼ぎにできれば、その苦勞に比して流

民同様の生活環境が待っていた。

第三の点は、医療保険・社会保険に、すくなくとも従業青年は加入できることである。医療保険の不在は、これまで農民にとって最大の問題だった。入院加療を必要とする病気には、現金難から手の打ちようがなかった。また農民には年金がない。90年代で、ムラの富裕層を形成していた人々は、退役軍人年金や、党や政府の役職にあった者のみがもらえる年金をもち、合作社社員として水田を保有している人々である。しかし、一般の農民は合作社の幹部に永年勤務した場合を除いては年金制度がなかった。これは老人になった時に、一切の現金を持ってないことを意味する。尊敬される老人であるためには、ある程度の現金が必要だ。工業区での常勤職の開放は、この不安を解消してくれる。

これを企業側からみれば、寄宿舍などの労働インフラ、検診などの福利インフラを合作社に依拠することによって、中国などに対抗する低賃金制度を維持することができる。

青年たちは今の状況を幸福であるとは言わない。現状を幸福と言えるのは老人の特権である。しかし、幸福でない状況は幸福への道の第1歩である。だから、青年たちはそこで得られた小さな現金をひたすら節約し、ひたすら貯蓄して、より豊かな生活を準備しようとしている。朝出かけて夜に帰る（サン・ディー・トイ・ヴェ）通勤型の農外労働は、ムラという共同体を離脱しないで、新しい市場経済に対応した労働力を生み出している。その共同体はベトナムのムラが歴史を通じて形成してきた農民の財産である。共同体という財産と、市場という資源が統合される日をバックコックの近未来に考えたい。

第9節 質問票

質問票¹

アジア農村研究会 2008年3月 ベトナム・ナムディン省調査

質問票(クエスチョニア) 2月2日検討版

0. 準備

0.1 調査日時

0.2 戸番

0.3 調査班・インタビュアー

0.4 通訳

こんにちは。

私たちは・・・私の名前は・・・(自己紹介)。

本日は大変お世話になります。

貴重なお時間をいただきありがとうございます。

調査の目的は、工業化による農村社会の発展についての研究です。

ご協力いただけると幸いです。

ベトナム語ができない学生が多く理解力が足りないので、録音をお許し願えればと思います。

1. 基礎情報

1.1 氏名

1.2 生年月日

1.3 出生地:「あなたは、この集落(ソム)で生まれ育ちましたか」

ソム:

村:

社:

省・県:

1.4 性別

2. 家族

(「ある程度の情報はすでに得ていますが、近年の変化もあると思いますし、具体的にお尋ねします」)

¹ 本節は2008年3月アジア農村研究会第16回調査実習レポート「ベトナム北部ナムディン近郊農村調査報告書」(2008年7月東京大学文学部東洋史学研究室内アジア農村研究会発行)125-137頁を転載したものである。

2.1 同居家族

2.1.1 同居している家族の成員：

「現在どなたと同居していますか、食事を共にしている家族はどなたですか」

未婚&両親と同居→2.2

既婚→2.3

2.2 未婚者の家族の状況

2.2.1 両親の年齢

2.2.2 両親の職業：「ご両親は何をされていますか／されていませんか」

2.2.3 他の家族の成員の職業（祖父母、兄弟…）

仕事をしている→仕事、そこで働き始めた理由、収入

2.2.4 遠方に住む家族の成員：「遠くに住んでいる家族の成員はいますか。」

（例：ナムディン、ハノイ、南部、外国など）

いる→場所、いつから、職業、送金、送金がある場合はいくらか

2.2.5 その他の話題

結婚の予定は、相手はどこの人、どのように知り合ったのか、

付き合っている期間、両親は同意済みか、結婚後はどこに住むのか、

こどもは何人欲しいか

2.3 既婚者の家族の状況

2.3.1 妻／夫の名前

2.3.2 妻／夫の年齢

2.3.3 妻／夫の出身地

2.3.4 どこで知り合ったか

2.3.5 結婚式：「結婚式は行いましたか」

Y→いつ、場所、招待客数、経費、など

2.3.6 住んでいる場所：「結婚後夫婦はどこに住みましたか、両親の家／両親が用意してくれた家、など」

2.3.7 妻／夫の職業

仕事をしている→仕事、そこで働き始めた理由、収入

2.3.8 子供の数、年齢と男女

17歳以上→何をしているか

2.3.9 家事：「日中は誰が子供の面倒を見ますか、誰が家族のために食事を作りますか」

2.3.10*その他に同居人がいる場合

→その他の成員の職業（同居している両親、兄弟）

2.3.11＊両親と住んでいない場合

→両親の職業：「ご両親はお元気ですが、現在はどこに住んで何をされていますか」

2.3.12 遠方に住む家族の成員：「遠くに住んでいる家族の成員はいますか。」

（例：ナムディン、ハノイ、南部、外国など）

Y→場所、いつから、職業、送金、送金がある場合はいくらか

3. 学歴

3.1 普通教育

3.1.1 何年生までか：「何年生まで学校に行きましたか」

3.1.2 最後に通った学校の名前と場所

3.2 普通教育以降

3.2.1 その後の学業の状況：「〇年生を終えた後、さらに勉強しましたか」

Yの場合→どこで勉強したか（例：短大、大学、職業学校など）

（カウザイン工業学校）

分野、場所、年数、年間の学費

＊どのような職業的訓練を経てきたかを把握すること

4. 職業

4.1 職場

4.1.1 分野

4.1.2 工場名

4.1.3 正確な住所

4.1.4 労働者数：「何人くらいの方が働いているかご存知ですか」

Y→人数

4.1.5 同じソムの人：「同じソム内に同じ会社に勤めている人はいますか」

Y→人数

4.2 仕事と仕事の条件

4.2.1 職務：「会社でどのような仕事を担当しているか」

4.2.2 そのくらいの期間か：「いつから現在の会社で働いていますか」

4.2.3 シフト：「シフトに従って働いていますか」

Y→何シフトあるか、それぞれのシフトは何時から何時までか、
何曜日にどのシフトか

N→勤務時間：「何時から何時まで働いていますか」

4.2.4 残業：「残業はたくさんしなければなりませんか」

Y→残業するのは好きか／嫌いか

忙しい／忙しくない時期は平均何時間残業するか

4.2.5 休み：「1週間の休みは何日か、それは固定か、固定の場合は何曜日ですか」

4.2.6 休みは何をするか

4.2.7 月々の給料と収入

4.2.8 最初の給料：「最初の給料はいくらでしたか」

4.2.9 給料の受給方法：「給料は銀行口座を通して払われますか、直接手渡しですか」

銀行口座の場合→いつからか、どの銀行に口座があるか、どのように引き出すか

4.3 労働組合

4.3.1 参加：「労働組合には参加していますか」

4.3.2 活動：「組合員の皆さんは組合でどのような活動をしますか」

4.3.3 費用：「組合費は月ないし年いくらですか」

4.4 職歴

4.4.1 以前働いていた場所：「ここで勤める以前は何をしていましたか」

他の場所で働いていた場合→場所、給料、やめた理由

4.4.2 現在の会社を選んだ理由：「他の会社ではなくこの会社を選んだ理由は何ですか」

4.4.3 現在の会社の募集情報へのアクセス：「この仕事を得た時、どのようにして現在の会社が募集中だと知ったのですか」

4.4.4 将来：「ここで働き続けたいですか、理由は何ですか」

4.5 交通手段：「どのような交通手段で仕事に行きますか」

自転車→4.5.1

バイク→4.5.2

バス→4.5.3

4.5.1.1 自転車の時間：「家から会社まで何分くらいかかりますか」

4.5.1.2 同行者：「誰かと一緒に行きますか」

4.5.2.1 バイクの時間

4.5.2.2 バイクを購入した時期

4.5.2.3 同行者：「誰かと一緒に行きますか」

4.5.2.4 バイク購入資金：「そのバイクはいくらでしたか、中古ですか新車ですか、買うお金はどのようにして賄いましたか、誰かに借金しましたか」

4.5.2.5 ガソリン代：「ガソリン代は1ヶ月いくらですか」

4.5.2.6 ガソリンを買う場所：「ガソリンはどこで買いますか、ガソリンスタンド、路上」

4.5.3.1 バスの時間

4.5.3.2 バスの種類：「会社のバスですか、路線バスですか」

4.5.3.4 バス停までの交通手段と時間

4.5.3.5 バス料金：バス料金は会社から支給されますか」

Y→いくらか

N→バス代

5. 保健

5.1 医療保険：「健康保険に入っていますか」

Y→形式（自主保険ないし社会保険）、1ヶ月ないし1年の費用

N→入りたいか

5.2 年金を受け取るための社会保険：「年金を受け取るための社会保険に入っていますか、失業した時にはお金を受け取ることができますか」

Y→形式（会社保険ないし社会保健）、1ヶ月ないし1年の費用

N→入りたいか

*保険に加入している場合は、その内容についてよく確認すること。

6. 支出

6.1 家族に渡すお金：「家族に1ヶ月にいくら渡していますか」

6.2 外での食事：「外での食事にかかる費用は1ヶ月にいくらくらいですか」

6.3 生活用品と食料品を買う場所

6.4 衣類費：「毎月衣服にはいくらくらい使いますか」

6.5 社交費：「社交費に1ヶ月いくらくらい使いますか、冠婚葬祭、プレゼント、遊びに行く、お茶する、飲みに行くなど」

6.6 貯金（=節約金）

6.6.1 月々の貯金：「1ヶ月にいくらくらい貯金しますか」

6.6.2 貯金を預ける場所：「貯金は預金口座、自分で管理、両親など、どこに預けますか」

6.6.3 目的：「貯金の主な目的は何ですか」

（例：教育費、家を建てるため、バイクの購入、結婚の準備など）

6.7 高額な買い物（100万ドン以上）

6.7.1 働いてから購入した高額なもの、DVD、バイク、携帯電話など

Yの場合→何か、いつか、いくらか

Nの場合→何が欲しいか

6.7.2 購入資金

7. 遊びや娯楽

7.1 どこに行くか：「遊びに行く時はどこに遊びに行きますか」

7.2 何をするか：「そこへ遊びに行ったら、主に何をしますか」

7.3 回数：「そこへはよく行きますか、1ヶ月ないし1年に何回ですか」

7.4 交通手段：「どのような手段で行きますか」

7.5 誰と行くか（例：恋人、兄弟、近所／学校／職場の友人など）

7.6 旅行には行きますか

Yの場合→どこか、いつか、どんな機会にか、誰とか

Nの場合→どこへ誰と行きたいか

8. 将来

8.1 「現在は幸福に感じていますか」

8.2 「幸福を感じる／感じない主な原因は何ですか」

8.3 「将来はどうなりたいと思っていますか」

8.4 「そのような将来を実現するために、どのような戦略や計画をを持っていますか」

8.5 「子どもたちにはどうなって欲しいですか」

どうもありがとうございました。

**Bảng câu hỏi điều tra tỉnh Nam Định Việt Nam
của Hội nghiên cứu nông thôn châu Á**

Tháng 3 năm 2008

(Dự thảo, ngày mùng 2 tháng 2)

*a/c: anh chị

*(): cách hỏi

0. chuẩn bị

- 0.1 ngày, giờ điều tra
- 0.2 số hộ
- 0.3 nhóm điều tra và tên người phỏng vấn
- 0.4 tên người phiên dịch

Xin chào a/c.

Chúng tôi là... em tên là...các bạn tên là...

Hôm nay chúng tôi đến làm phiền anh chị.

Xin anh /chị bớt chút thời gian trả lời cho chúng tôi.

Mục Đích điều tra là nghiên cứu phát triển xã hội nông thôn thời kỳ công nghiệp hóa Việt Nam.

Chúng tôi rất mong nhận được sự giúp đỡ nhiệt tình của anh /chị.

Hầu hết thành viên trong đoàn là sinh viên chưa nghe, nói thạo tiếng Việt. Vì vậy anh/chị vui lòng cho phép chúng tôi được ghi âm cuộc phỏng vấn này.

1. Những thông tin cơ bản

- 1.1 họ và tên
- 1.2 sinh: ngàythángnăm
- 1.3 nơi sinh : “a/c sinh ra và lớn lên ở xóm này hay không?”
xóm , thôn....., xã, huyện.....tỉnh.....
- 1.4 nam/nữ

2. Gia đình

“Chúng tôi đã có trong tay một số thông tin, nhưng để xác định sự thay đổi trong thời gian gần đây nên chúng tôi đã làm những câu hỏi cụ thể như sau: ”

2.1 gia đình ở chung

2.1.1 thành viên của gia đình ở chung : “a/c ở với ai, ăn chung với ai?”

nếu chưa có gia đình ,ở cùng với bố mẹ đẻ →2.2

nếu có gia đình rồi → 2.3

2.2 tình hình a/c chưa có gia đình

2.2.1 tuổi của bố mẹ

2.2.2 nghề nghiệp của bố mẹ : “bố mẹ a/c đang/đã làm gì?”

2.2.3 nghề nghiệp của các thành viên trong gia đình (ví dụ: ông, bà, anh chị em...)

nếu đi làm→ làm gì? lý do chọn này ? thu nhập hàng tháng?

2.2.4 các thành viên gia đình ở xa

“a/c có thành viên nào trong gia đình đi làm ở xa không?”

(ví dụ: ở Nam Định, Hà Nội, miền Nam hay nước ngoài, v.v...)

nếu có→ ở đâu? từ khi nào? nghề nghiệp?

có gửi tiền về cho gia đình hàng năm không?

nếu có gửi về khoảng bao nhiêu tiền một năm?

2.2.5 những vấn đề khác

(a/c đã có kế hoạch lập gia đình chưa? nếu có thì đó là người ở đâu? quen nhau như thế nào? yêu nhau bao lâu? gia đình đã đồng ý chưa? sau khi lấy nhau a/c sẽ sống ở đâu? a/c muốn sinh mấy con...v.v...)

2.3 tình hình a/c có gia đình

2.3.1 tên người vợ / chồng

2.3.2 tuổi của người vợ / chồng

2.3.3 quê của người vợ /chồng

2.3.4 quen nhau ở đâu ?

2.3.5 đám cưới : “a/c có tổ chức đám cưới không?”

có tổ chức → thời gian? nơi tổ chức? số người mời?

chi phí hết khoảng bao nhiêu? v.v...

2.3.6 nơi ở :”sau khi lấy nhau a/c ở đâu ? nhà bố mẹ mua cho hay thuê ?”

2.3.7 nghề nghiệp của vợ/chồng?

đi làm→làm gì, lý do chọn nghề này? thu nhập hàng tháng là bao nhiêu?

2.3.8 số người con ? tuổi ? nam hay nữ?

hơn 17 tuổi→ đang làm gì?

2.3.9 nội trợ “Ban ngày ai là người chăm sóc con và nấu cơm cho gia đình?”

- 2.3.10 *nếu ở với người khác→nghề nghiệp của các thành viên khác trong gia đình?
(bố mẹ, anh chị ở chung)
- 2.3.11 *nếu không ở với bố mẹ→ “bố mẹ a/c có khỏe không ?
hiện nay bố mẹ a/c đang ở đâu? đang làm gì?”
- 2.3.12 các thành viên gia đình ở xa
“a/c có thành viên nào trong gia đình đi làm ở xa không?”
(ví dụ: Nam Định, Hà Nội, miền Nam và nước ngoài, v.v...)
nếu có→ ở đâu ? từ khi nào? nghề nghiệp?
có tiền gửi về cho gia đình hàng tháng/năm không?
nếu có gửi về bao nhiêu tiền một tháng/năm?

3. Học vấn

3.1 giáo dục phổ thông

- 3.1.1 học hết lớp mấy ? :”a/c đi học đến lớp mấy?”
- 3.1.2 tên và địa điểm của trường học mà a/c học cuối cùng

3.2 sau giáo dục phổ thông

- 3.2.1 tình hình học tiếp: ”sau khi hết lớp a/c có đi học nữa không”
nếu có→ học ở đâu? (ví dụ: cao đẳng, đại học, trường học nghề...)
(trường Cầu Giành)
ngành gì? ở đâu? học mấy năm? học phí bao nhiêu tiền 1 năm?

4. Nghề nghiệp

4.1 c/ty đi làm

- 4.1.1 ngành gì?
- 4.1.2 tên c/ty nào?
- 4.1.3 địa chỉ chính xác?
- 4.1.4 số người lao động: “a/c có biết c/ty của a/c có bao nhiêu người làm không?”
nếu có→ số người là bao nhiêu?
- 4.1.5 người cùng xóm: “trong xóm của a/c có người nào đi làm ở c/ty đó không?”
nếu có→số người là bao nhiêu?

4.2 công việc và điều kiện làm việc

- 4.2.1 công việc: “a/c phụ trách công việc gì tại c/ty ?”
- 4.2.2 thời gian bao lâu: ”a/c bắt đầu làm việc ở c/ty này từ khi nào?”
- 4.2.3 ca: “a/c có làm việc theo ca không?”
 nếu có→ bao nhiêu ca/1 ngày, mỗi ca từ mấy giờ đến mấy giờ?
 ngày nào theo ca nào?
 nếu không→ thời gian làm việc: “a/c làm việc từ mấy giờ đến mấy giờ?”
- 4.2.4 làm thêm ngoài giờ: “a/c có phải làm thêm ngoài giờ nhiều hay không?”
 nếu có→ a/c thích làm hay không thích làm?
 khi bận việc/ không bận việc làm thêm bình quân mấy tiếng /1 ngày?
 bao nhiêu tiền /1 tiếng ?
- 4.2.5 ngày nghỉ: “a/c có ngày nghỉ một tuần bao nhiêu ngày?
 ngày đó có cố định không, đó là ngày nào?”
- 4.2.6 làm gì trong ngày nghỉ
- 4.2.7 lương và thu nhập một tháng là bao nhiêu?
- 4.2.8 tháng lương đầu tiên: “tháng lương đầu tiên là bao nhiêu?”
- 4.2.9 phương thức cấp lương:
 “lương được cấp qua tài khoản hay trả trực tiếp tận tay?”
 trả qua ngân hàng→ từ khi nào? có tài khoản ở ngân hàng nào?
 rút tiền như thế nào?

4.3 Tổ chức công đoàn lao động

- 4.3.1 tham gia: “a/c có tham gia tổ chức CĐLĐ không?”
- 4.3.2 hoạt động công đoàn: “a/c công đoàn viên có hoạt động gì ở CĐLĐ?”
- 4.3.3 Công đoàn phí: “phí CĐLĐ là bao nhiêu tiền một tháng hoặc một năm?”

4.4 lý lịch nghề nghiệp

- 4.4.1 nơi làm trước: “trước khi a/c đi làm ở c/ty này ?, a/c đã làm gì? ở đâu?”
 đi làm nơi khác→ nơi làm? lương ở đó? lý do thôi việc?
- 4.4.2 lý do chọn c/ty này:
 “Những lý do a/c chọn không phải c/ty khác mà là c/ty hiện nay ?”
- 4.4.3 tiếp cận thông tin tuyển người của c/ty hiện nay ?:
 “Tại sao a/c biết c/ty này cần tuyển người mà a/c xin tuyển vào?”
- 4.4.4 tương lai: “a/c muốn tiếp tục làm việc ở đây hay không? lý do là gì?”

4.5 phương tiện đi lại : ”a/c đi làm bằng phương tiện gì?”

xe đạp→ 4.5.1

xe máy→ 4.5.2

xe buýt→ 4.5.3

4.5.1.1 thời gian đi bằng xe đạp: “a/c mất bao nhiêu phút từ nhà đến c/ty?”

4.5.1.2 người đi cùng: “a/c có đi làm cùng với ai không?”

4.5.2.1 thời gian đi bằng xe máy?

4.5.2.2 thời điểm mua xe máy?

4.5.2.3 người đi cùng: “a/c có đi làm cùng với ai không?”

4.5.2.4 vấn đề mua xe máy: “xe đó bao nhiêu tiền ? xe cũ hay xe mới? a/c tiết kiệm tiền để mua xe như thế nào? có phải vay tiền từ ai không?”

4.5.2.5 tiền xăng: “a/c mất bao nhiêu tiền xăng một tháng?”

4.5.2.6 nơi mua xăng: “a/c thường mua xăng ở đâu? tại trạm xăng hay trên lề đường?”

4.5.3.1 thời gian đi bằng xe buýt?

4.5.3.2 loại xe: “xe đó là xe của c/ty hay xe công cộng?”

4.5.3.3 phương tiện đi đến trạm xe buýt? thời gian mất bao nhiêu?

4.5.3.5 chi phí xe buýt: “a/c được c/ty cấp chi phí xe buýt hay không?”

nếu có→ số tiền được cấp là bao nhiêu/ 1 tháng?

nếu không→ phí xe buýt là bao nhiêu/1tháng?

5 bảo hiểm

5.1 bảo hiểm y tế: “a/c có bảo hiểm y tế không?”

nếu có→ hình thức (tự nguyện hay xã hội),
chi phí một tháng hoặc một năm là bao nhiêu?

nếu không→ a/c có muốn mua không?

5.2 bảo hiểm xã hội để nhận lương hưu: “a/c có bảo hiểm xã hội để nhận

lương hưu không ? Khi thất nghiệp thì có nhận tiền được không ?”

nếu có→ hình thức (của c/ty hay của nhà nước?),
chi phí một tháng hoặc một năm

nếu không→ a/c có muốn mua không?

*trong trường hợp a/c ấy có bảo hiểm, xin hỏi nội dung chi tiết.

6. chi tiêu

6.1 tiền đưa cho gia đình: “a/c đưa bao nhiêu tiền một tháng cho gia đình?”

6.2 tiền ăn ở ngoài: “chi phí ở ngoài một tháng là bao nhiêu tiền?”

- 6.3 nơi mua sắm đồ sinh hoạt và đồ ăn?
- 6.4 chi phí mua quần áo: “a/c mỗi tháng sử dụng bao nhiêu tiền để mua quần áo?”
- 6.5 chi phí xã giao:
 - “chi phí xã giao như: cưới xin, ma chay, thăm hỏi ốm đau, sinh đẻ, đi chơi, đi uống nước, đi ăn nhậu hết khoảng bao nhiêu tiền một tháng?)

6.6 tiền tiết kiệm

- 6.6.1 tiền tiết kiệm một tháng: “a/c tiết kiệm được bao nhiêu tiền một tháng?”
- 6.6.2 nơi gửi tiền tiết kiệm:
 - “a/c có sổ tiết kiệm hay tự quản lý hay gửi bố mẹ giữ tiền hộ”
 - sổ tiết kiệm → gửi ở ngân hàng nào? từ khi nào?
 - tự quản lý → bằng tiền mặt hay mua vàng ?
- 6.6.3 mục đích : mục đích chủ yếu tiết kiệm để làm gì?
 - (ví dụ: như chi phí giáo dục, để xây nhà, mua xe máy, chuẩn bị cưới, v.v...)

6.7 mua sắm đồ đắt tiền

- 6.7.1 đồ đắt tiền mua sau khi bắt đầu đi làm ví dụ như đầu máy DVD, xe máy, điện thoại di động, v.v...
 - nếu có → mua cái gì? khi nào? giá bao nhiêu tiền?
 - nếu không → a/c muốn mua cái gì nếu có tiền ?
- 6.7.2 vốn để mua

7. hoạt động giải trí

- 7.1 đi đâu: “đi chơi vào thời gian nào? a/c đi chơi ở đâu?”
- 7.2 làm gì: “khi đến đó, a/c sẽ làm gì?”
- 7.3 số lần: “a/c đi đến đó 1 tháng mấy lần?”
- 7.4 phương tiện đi lại: “a/c đi đến đó bằng phương tiện gì?”
- 7.5 đi với ai ?
- 7.6 đi du lịch hay không
 - nếu có → đi đâu, khi nào, dịp nào, với ai?
 - nếu không → thích đi đâu với ai?

8. tương lai

- 8.1 “hiện nay a/c có cảm thấy hạnh phúc không?”

- 8.2 “lý do gì mà a/c cảm thấy hạnh phúc / không hạnh phúc là gì?”
- 8.3 “trong tương lai a/c muốn trở thành người như thế nào?”
- 8.4 “a/c có chiến lược hoặc kế hoạch như thế nào để thực hiện tương lai đó?”
- 8.5 “a/c muốn con mình trở thành người như thế nào?”

Xin chân thành cảm ơn anh /chị.